

南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅱ

2015・2016年度 埋蔵文化財調査

2022年3月

兵庫県南あわじ市教育委員会

南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅱ

2015・2016年度 埋蔵文化財調査

2022年3月

兵庫県南あわじ市教育委員会



中の御堂遺跡遠景（東から）



国衙廃寺跡遠景（南東から）



国術庵寺跡（5次調査） 21区S X 156 出土製埴土器



国術庵寺跡（5次調査） 28区S X 18 遺物出土状況（北西から）

## はじめに

兵庫県最南端に位置する南あわじ市は、周囲を海に囲まれた自然豊かな農業・漁業が非常に盛んなまちです。そうした豊かな自然から得られた恵みが、古くから我々の祖先の生活を支えていたことは想像に難くありません。

この度、平成27・28年度に行った埋蔵文化財調査の結果を『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』として刊行する運びとなりました。今回の報告は国衙地区と養宜地区の調査成果が中心となっています。また平成27年4月には松帆銅鐸7点が発見され、これ以降本市を取り巻く文化財行政や環境は急展開で変化していきました。おかげをもちまして、現在松帆銅鐸は皆様のご指導・ご協力により、令和2年11月から南あわじ市滝川記念美術館玉青館において、一般公開が始まっています。

今後本市といたしまして、松帆銅鐸をはじめとして豊かな歴史文化遺産の保護と継承に力を注いでいきたいと考えていますので、より一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、調査ならびに本書を作成するにあたり、ご協力いただいた方々に対し心よりお礼申し上げます。

令和4年3月

南あわじ市教育委員会  
教育長 浅井 伸行

## 例 言

1. 本書は、兵庫県南あわじ市教育委員会が2015・2016（平成27・28）年度に実施した埋蔵文化財調査の記録である。
2. 調査は、南あわじ市埋蔵文化財調査事務所の山崎裕司・坂口弘貢・定松住重、的崎薫（現南あわじ市滝川記念美術館玉青館）が担当した。
3. 出土遺物の整理作業は、赤井友美・宇治山力・垣脇美奈子・白川裕二・富岡美早子・豊田亜希子・濱本善美・榎本早苗・松下矩之・三宅靖子が行った。
4. 本書の編集は、白川・宇治田・坂口が行った。執筆・レイアウトについては文末に記している。調査担当者については、調査一覧に記す。
5. 各遺跡の発掘調査および本書作成にあたっては、森岡秀人氏にご協力とご指導をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表する。

# 目 次

巻頭写真図版

はじめに

例言

第1章	埋蔵文化財事業の動向	1
第2章	埋蔵文化財調査の成果	2
第1節	埋蔵文化財調査一覧および調査位置図	2
第2節	主な埋蔵文化財調査の成果	4
1項	平成27年度調査	4
1	国衙廃寺跡（3次調査）	4
2	国衙廃寺跡（4次調査）	14
3	荒目遺跡（1次調査）	18
2項	平成28年度調査	22
4	国衙廃寺跡（5次調査）	22
5	国衙廃寺跡（6次調査）	39
6	入田稲荷前遺跡・姥畑遺跡・喜平前遺跡・南畑遺跡（1次調査） 荒目遺跡（2次調査） 森ノ腰遺跡（1次調査）	46
7	長手遺跡（3次調査）	65
8	中の御堂遺跡	70
9	中筋古城跡（1次調査）	72

## 第1章 埋蔵文化財事業の動向

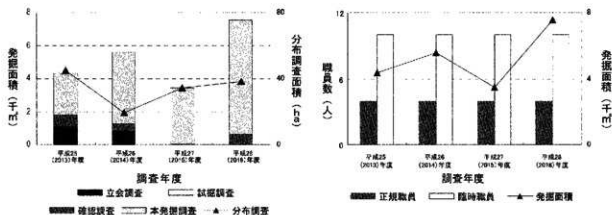
平成27年度は、分布調査2件、確認調査1件、本発掘調査2件の調査を実施した。確認調査と本発掘調査の調査面積の合計は、3,471.3㎡となる。主な発掘調査は神代国衙地区での県営園場整備事業と市道の新設事業に伴う発掘調査が中心となる。また平成27年4月8日に松帆1・2号銅鐸が発見され、5月20日までの開闢施設周辺立会調査を実施した結果、合計7点の銅鐸と7本の銅舌を確認した。

平成28年度は、分布調査3件、確認調査4件、本発掘調査3件の調査を実施した。確認調査と本発掘調査の調査面積の合計は、7,545㎡となる。主な発掘調査は神代国衙地区と八木入田・養真中・養真上地区での県営園場整備事業に伴う発掘調査が中心となる。

年度	分布調査	立会調査	試掘調査	確認調査	本発掘調査	発掘面積	職員数	
							正規職員	臨時職員
平成25 (2013)年度	45.1	1,068.6	7.0	738.0	2,502.6	4,333.2	4	10
平成26 (2014)年度	19.2	809.4	2.0	404.0	2,209.3	6,585.7	4	10
平成27 (2015)年度	34.3	0	0	56.0	3,415.3	3,471.3	4	10
平成28 (2016)年度	38.2	0	0	685.9	6,858.1	7,544.0	4	10

※単位：分布調査(㎡) 調査面積(㎡)

調査量と職員数の推移 1



啓蒙普及活動として、平成27年度は銅鐸発見に伴い、7月14日～8月16日に玉青館で「松帆銅鐸速報展」、2月7日に中央公民館で松帆銅鐸発見記念シンポジウム「松帆銅鐸の大発見と謎」を開催した。また定期的を実施している「発掘調査速報展-平成26年度調査-」を市内4ヶ所の施設で巡回展示した。さらに夏休み期間中の7月25日に賀集公民館において「夏休み“ちびっ子考古学教室”」を開催した。平成28年度は、3月5日に中央公民館で講演会「謎多き銅鐸を解明するのは松帆銅鐸だ!」、3月7日～26日に玉青館で「松帆銅鐸一時帰国展」を開催した。

刊行物としては、27年度に速報展のパンフレットと『上久保遺跡』、28年度に『南あわじ市文化財調査年報IX』、『大野遺跡I』をそれぞれ発行した。

(坂口)



夏休み“ちびっ子考古学教室”の様子

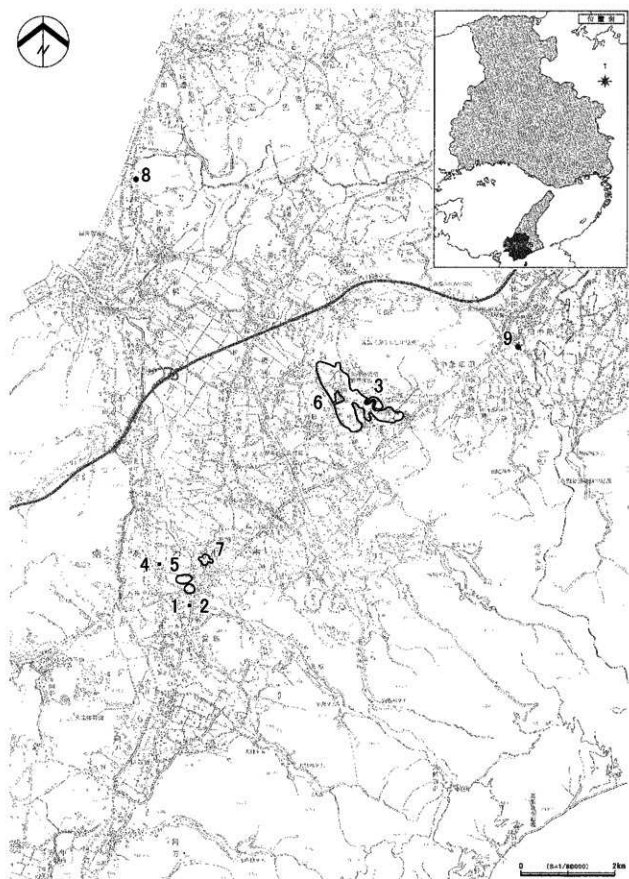
## 第2章 埋蔵文化財調査の成果

### 第1節 埋蔵文化財調査一覧および調査位置図

番号	事業名	内容	面積	担当者	遺跡名	所在地1	所在地2	調査期間	調査成果
1	鎌倉平野縄文遺跡発掘調査 (H26地区)	本発掘	2,373.3㎡	坂口・山崎	諏訪野9跡 (3.30)	神代	国衙	平成27年6月1日～12月7日	奈良・平安時代・中世の遺構・遺物確認。
2	内庭地区国衙跡発掘調査	本発掘	1,040㎡	山崎	諏訪野9跡 (4.30)	神代	国衙	平成27年6月28日～平成27年8月4日	奈良時代・中世の遺構・遺物確認。
3	各地埋蔵文化財調査 (鎌倉平野式土器) 縄文遺跡発掘調査	確認	56㎡	的崎・定松	的崎4遺跡 (1.30)	八木	養直中	H26 27年10月28日～11月4日	弥生・奈良時代・中世の遺構・遺物確認。
	縄文競争力強化施設整備事業 (長山地区)	分布	24.3ha	的崎		松文	長田	平成28年2月12・19・25日	中世以降の遺物採集。
4	鎌倉平野縄文遺跡発掘調査 (西山北地区)	分布	10ha	坂口		志知	中島	平成28年3月16・17日	遺物わずかに散布。
	鎌倉平野縄文遺跡発掘調査 (宮加地区)	本発掘	3,086.5㎡	坂口・山崎	諏訪野9跡 (5.30)	神代	国衙	平成28年5月28日～12月25日	弥生・奈良・平安時代・中世の遺構・遺物確認。
5	市道狭小地区埋蔵文化財調査	本発掘	2,181.8㎡	山崎	諏訪野9跡 (6.30)	神代	国衙	平成28年6月2日～平成29年2月1日	弥生・奈良・平安時代・中世の遺構・遺物確認。
6	延岡地区縄文遺跡発掘調査 (養直地区)	確認	601㎡	的崎・定松	入舟野発掘遺跡 (1.30) 神保遺跡 (1.30) 古平坂遺跡 (1.30) 南塚遺跡 (1.30) 荒日遺跡 (2.30) 森ノ敷遺跡 (1.30)	八木	養直上・養直中・入田	平成28年6月13日～17月15日	縄文・弥生時代～中世の遺構・遺物確認。
7	鎌倉平野縄文遺跡発掘調査 (H26地区)	本発掘	1,591㎡	山崎	森ノ敷遺跡 (3.30)	神代	国衙	平成28年6月16日～11月7日	弥生時代中期後半・中世の遺構・遺物確認。
8	中の野土器遺跡発掘調査	確認	40.9㎡	定松	中の野土器遺跡	松明	鹿野	平成28年10月3日～14日	平安時代の遺物確認。
9	小学校倉庫埋蔵文化財調査 (北口牛形地区・H26)	確認	30㎡	定松	神明神前遺跡	渡	庄	平成28年12月17日	遺構・遺物未確認。
	住宅開発事業 (北口牛形地区・H26)	確認	8㎡	的崎	宇吉稲跡 (1.30)	広田	牛橋	平成29年1月17日	弥生時代後期・古墳・鎌倉時代の遺物確認。定構未確認。
	新倉平野縄文遺跡発掘調査 (新田中地区)	分布	8ha	山崎		北阿万	新田中・横井	平成29年2月1日～14日	遺物散布希薄。
	鎌倉平野縄文遺跡発掘調査 (上町地区)	分布	30ha	山崎		阿万	上町	平成29年3月9日～4月14日	律令期～中世の遺物採集。
	被災地区調査事業	分布	0.23ha	坂口	神の土産城跡	買集	福井	平成29年3月15日	遺物わずかに散布。

調査一覧





調査位置図

## 第2節 主な埋蔵文化財調査の成果

### 1項 平成27年度調査

#### 1. 国衙鹿寺跡 - 3次調査 -

所在地 神代国衙天王外

事業名 経営体育成基盤整備事業（国衙地区第1工区）

担当者 坂口弘貴・山崎裕司

種別 本発掘調査

調査期間 平成27年6月1日～12月7日

調査面積 2,375.3㎡



調査の位置

#### 1. 調査内容

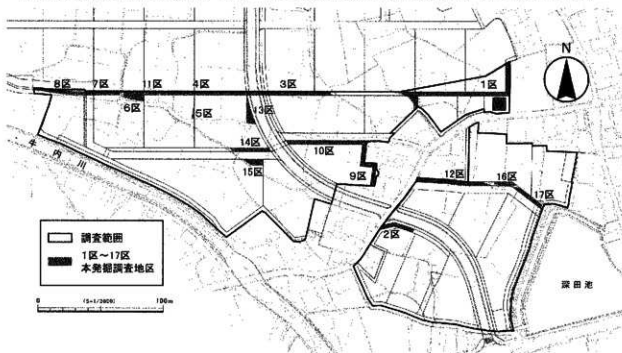
本調査は、神代国衙・賀集立川瀬地区で計画されている景観園場整備事業に伴う調査である。

調査地は、三原平野中央南寄りの南東～北西方向に緩やかに傾斜する水田などからなり、南側を牛内川が流れる。調査地北西部には綜ヶ淵遺跡（縄文・弥生・奈良・平安時代・中世）、北部には木辺遺跡（縄文・弥生・古墳・奈良・平安時代・中世）、北東部には長手遺跡（中世）が分布する。今回の調査地は国衙鹿寺跡（奈良・平安時代・中世）として遺跡登録されている南側約1/4が該当する。

調査は、平成25・26年度に行った確認調査結果に基づき、地下の文化財に影響が及ぶ排水路・園場・構造物設置部分を対象に重機・人力併用で進めていった。以下、主な調査区の概要を記す。

#### [1区]

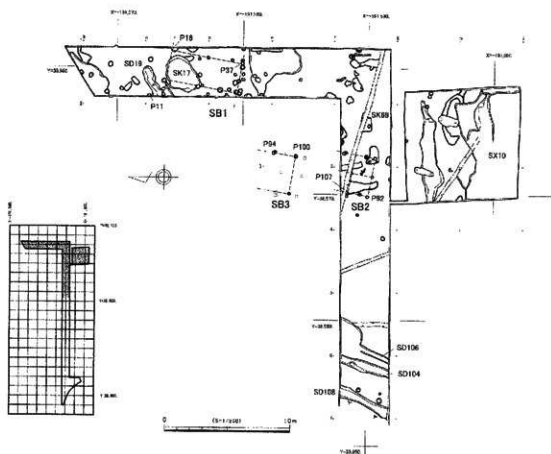
調査地北東部に位置する排水路・園場・ポンプ場設置部分の調査区である。調査面積520.1㎡。



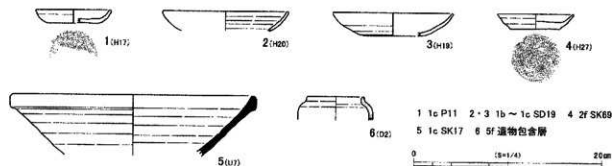
調査区設定図

遺構は調査区全体で確認しているが、柱穴や土坑など居住城と思われる遺構は、1a～3f区の調査区東部と7f～15f区の西半部に集中する傾向がある。調査地南東部は浅い落込みSX10で湧水が多くなっており、古代においては居住城ではなかったと思われる。出土遺物が極端に少なく、時期決定は困難な部分が多いが、中世を中心として一部は近世から近代頃と思われる。

SB1 1c～1d区に位置する掘立柱建物である。規模は南北2間(5.8m)、東西1間(2.6m)以上で柱間は2.35～2.9mを測り、P37-16を基準にした方位は座標北に対しN10°Eを示す。遺物は土師器小片が出土している。

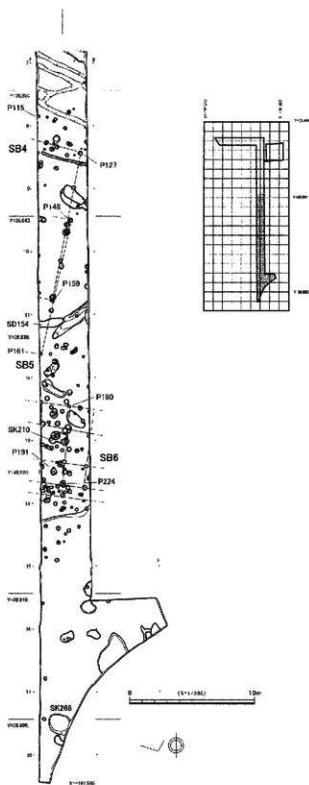


1区 平面図1



1区 出土遺物1

1 1c P11 2・3 1b～1c SD19 4 2f SK89  
5 1c SK17 6 5f 遺物包舎層



1区 平面図2

SB2 2f~3f区に位置する総柱の獨立柱建物である。規模は南北1間(1.7m)以上、東西2間(3.2m)で、柱間は1.5~1.7mを測る。P92-107を基準にした方位は座標北に対しN9.5°Eを示す。

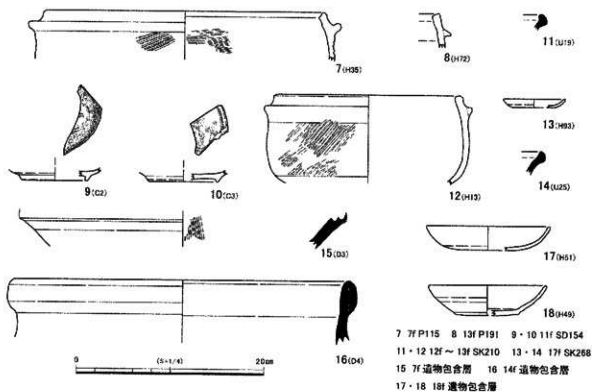
SB3 2f~3f区に位置する獨立柱建物で、建物2と重複する。規模は南北1間(1.75m)以上、東西1間(3.05m)を測る。P100-94を基準にした方位は座標北に対しN10°Eを示す。これら建物に伴う良好な遺物は非常に少ないが、周辺から出土した遺物から中世の後半頃が想定される。

SB4 8f~10f区に位置する獨立柱建物である。規模は東西4間(12.0m)、南北1間(2.9m)以上で柱間は2.8~3.2mを測る。P127-159を基準にした方位は座標北に対しN80°Wをとる。遺物は土師器小片が出土している。

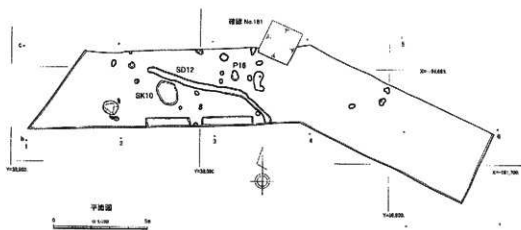
SB5 9f~11f区に位置する獨立柱建物である。東西3間分(11.0m)の柱列が確認できており北側にのびると考えられる。柱間は3.6~3.7mを測る。P148-161を基準にした方位は座標北に対しN78.5°Wを示す。遺物は土師器小片が出土している。

SB6 12f~13f区に位置する総柱の獨立柱建物である。規模は東西4間(7.2m)、南北2間(3.9m)以上で、柱間は0.9~2.6mを測る。P180-224を基準にした方位はN85.5°Wを示す。西側1間分は廂と考えられる。遺物は土師器小片が出土している。これら建物に伴う遺物は先の建物群同様非常に少ないものの、周辺から出土した遺物から中世後半が想定される。

SD104・106・108 5f~6f区に位置する溝である。平行する形でN20°~27°E方向の傾きを有する。遺物は土師器など小片であるが、埋土が他の建構と若干異なることから、時期は古代の可能性が高い。



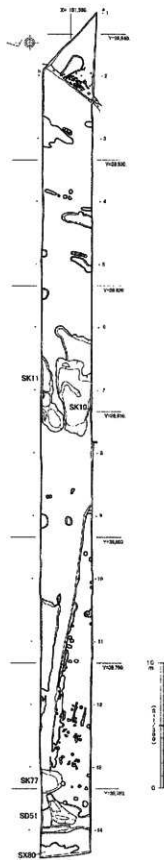
1区 出土遺物 2



2区 平面図



2区 出土遺物



3区 平面図

[ 2区 ]

調査地南部に位置する排水路部分の調査区である。調査面積 92.7 m<sup>2</sup>。

小穴、溝などの遺構を確認した。大半は自然の浅い窪み状の遺構と思われる。その内SK 10は長辺1.4m、短辺1.0m、深さ約10cm、SD 12は最大幅約40cm、深さ約8cmを測る。遺物は小片で少ないものの土師器、製塩土器、須恵器片がある。中世の遺物を含まないことから、時期は古代の可能性が高い。

[ 3区 ]

調査地中央部北寄りに位置する排水路部分の調査区である。調査面積 261.4 m<sup>2</sup>。

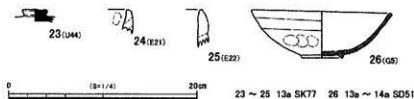
調査区東半部は近世頃の溝状遺構や大型の土坑SK 10・11などが分布する。西半部については中世の自然の浅い窪み状遺構が中心で、居住域を示すような状況ではない。西端部では南から北方向にのびる溝状の遺構SD 51や落込みSX 80を確認した。SD 51は最大幅約3.0m、最大の深さ約30cmで瓦器塊26などが出土している。13 a区に位置する土坑SK 77は幅1.8m、深さ約12cmの遺構で、土師器、須恵器23、製塩土器24・25の小片が出土している。埋上が他の遺構と異なり、中世の遺物が認められないことから、古代の遺構の可能性が高い。

[ 4区 ]

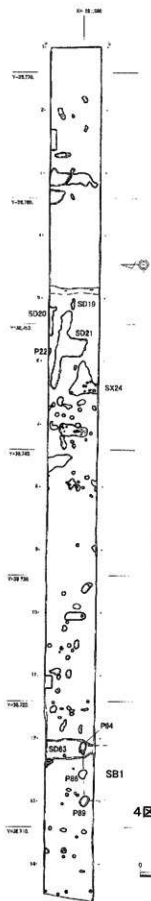
調査地中央北寄りに位置する排水路部分の調査区である。調査面積 271.4 m<sup>2</sup>。

東半部では自然の浅い窪み又は溝状遺構を確認した。1 a～3 a区の遺構は近世が中心と思われる。5 a～6 a区の溝SD 19・20・21、小穴P 22は中世、落込みSX 24は近世と思われる。

西半部では土坑や溝、柱穴状の遺構が確認できた。12 a～13 a区にかけて南側にのびる掘立柱建物と考えられる東西2間(4.4m)の柱列SB 1を確認した。P 89-94を基準とする方位は座標北に対しN 89° Eを示す。柱穴は長辺が約70～90cmと比較的大型で土師



3区 出土遺物



4・5区 平面図

器、須恵器 28、製塩土器 29 が出土しており、奈良時代後半～平安時代初頭の建物と思われる。他の遺構についても遺物が少なく小片のものが多く、9 a～10 a区と12 a区以西の遺構は、古代が中心と想定される。

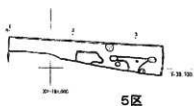
〔 8 区 〕

調査地西部に位置する排水路部分の調査区である。調査面積 90.4 m<sup>2</sup>。

掘立柱建物や土坑、溝、小穴などを確認した。SB1は東西7間(15.3m)以上、南北1間(2.2m)以上で、柱間は2.1～2.3mを測る。P11-1を基準とする方位は座標北に対しN88°Eを示す。柱穴から土師器30・31、須恵器33、製塩土器、黒色土器32小片が出土しており、平安時代中葉と考えられる。溝SD15は調査区の西端にあり、幅約50cm、深さ20cmを測る。遺物は土師器小片が出土しており、中世と思われる。

〔 9 区 〕

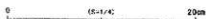
調査地中央部の排水路部分の調査区である。調査面積 161.4 m<sup>2</sup>。



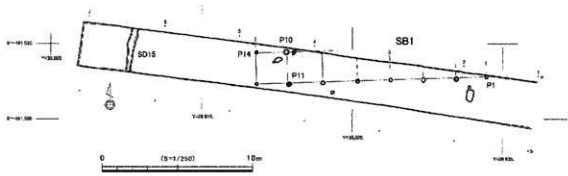
5区



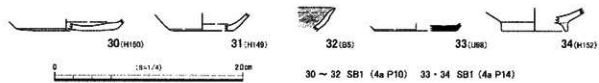
- 27 12a SD63
- 28 SB1 (12a P68)
- 29 SB1 (12a～13a P69)



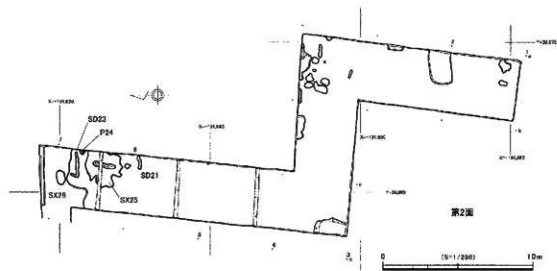
4区 出土遺物



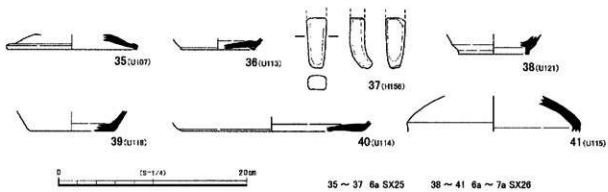
8区 平面図



8区 出土遺物

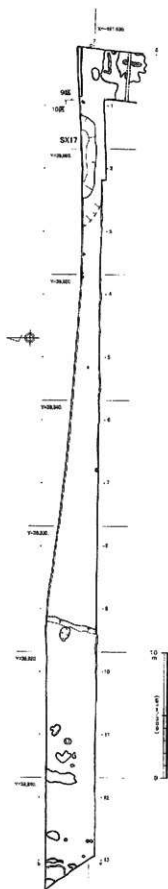


9区 平面図



9区 出土遺物





10区 平面図

3a~3b区では、自然の浅い窪み状の遺構を確認した。6c~7c区第1面では、土坑・小穴・溝などを確認した。第2面では、自然の浅い窪み状遺構SX 25、落込みSX 26、溝SD 21・23、小穴P 24などを確認した。第1面の遺構は埋土が白色系で中世と思われる。第2面の遺構SX 25・26から土師器、須恵器35・36、38~41、土製品37、製塩土器の小片などが出土しており、奈良時代後半~平安時代初頭と考えられる。

[10区]

調査地中央部の排水路部分の調査区である。調査面積 194.9 m<sup>2</sup>。

生活に関連する遺構はなく、自然の浅い窪み状の遺構や落込みを確認した。西端部は近世以降の遺構が中心と考えられる。1a~2a区にかけて確認した落込みSX 17は、9区の落込みSX 26と同一の遺構である。遺物は土師器、須恵器42~46、製塩土器小片が出土しており、奈良時代後半~平安時代初頭と考えられる。

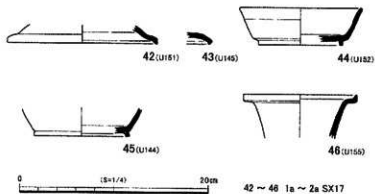
[12区]

調査地中央部の排水路部分の調査区である。調査面積 150.1 m<sup>2</sup>。

湧水が多く確認した遺構は少ない。西半部では小穴や小規模な溝状の遺構、中央部で溝SD 16、東半部で自然の浅い窪み状の遺構を中心に確認した。西半部では遺物は全体に少なく、中世以降が中心と思われる。埋土が黒色系となる小穴P 6や溝SD 5・13は中世以前の可能性が考えられる。中央部のSD 16は流路状の遺構で幅約6.5m、深さ約90cmを測る。遺物は須恵器47~51、土師器52・53、製塩土器54が出土しており、奈良時代後半~平安時代初頭と考えられる。

[17区]

調査地南東部、深田池西側に位置する排水路部分の調査区であ



10区 出土遺物

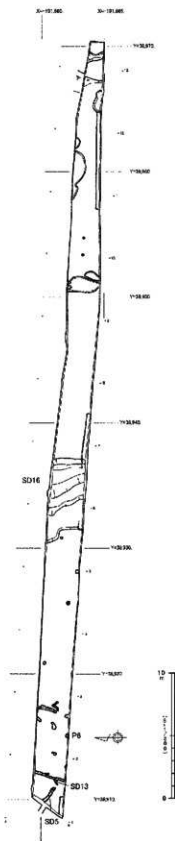
る。調査面積 99.2 m<sup>2</sup>。

12区同様湧水が多く、軟弱な土層で遺構・遺物は少ない。  
5 a 区の SK 12 は長辺 1.54 m、短辺 1.02 m、深さ約 16 cm  
を測る。古代の平瓦などが出土しているが、埋土が白色系で  
中世の遺構と考えられる。

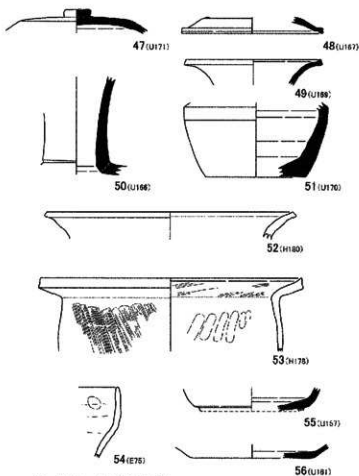
1 a ~ 4 a 区の窪み状遺構 SX 9 は、幅約 14 m、最大の  
深さ約 20 cm を測る。埋土は 3 層に大別できる。遺物は多く  
ないが、奈良時代後半期の須恵器、土師器 57・58、製塩土  
器 59 ~ 62 などが出土している。その下層について断割りを  
行った結果、遺物は出土しておらず、奈良時代以前は溝状の  
地形になっていたことが分かった。

## 2. まとめ

本調査において、奈良時代～近世にかけての遺構又は遺物



12区 平面図



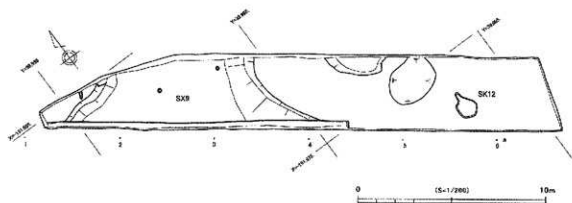
47 ~ 54 5a ~ 8a SD16 最下層

55 3a 遺物包含層

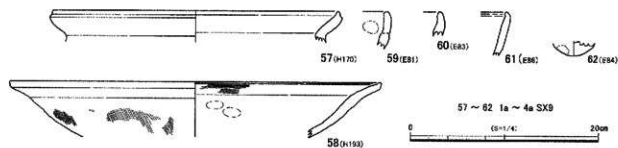
56 5a 遺物包含層



12区 出土遺物



17区 平面図



17区 出土遺物

を確認することができた。ただし生活に関係する遺構は少なく、自然地形の変化に伴うものが多い。

奈良～平安時代の遺構・遺物は全体的に少ないものの調査地内から断片的に確認できた。4区西半部と8区では、奈良～平安時代と思われる掘立柱建物や土坑・小穴など居住域の一部を確認することができ、北側に同時期の遺構の広がりが想定される。調査区幅が狭いことと周辺からの遺物が少なく、詳細は今後の課題であるが、4区柱列の柱穴規模や8区建物の規模が比較的大きいことから注意を要する。

中世の遺構は、1区を中心に建物を6棟確認することができた。11 f～14 f区にかけては柱穴状の遺構が多く、周辺に集落が広がると考えられる。ただし遺物が土師器の小破片や遺物を伴わない遺構が多く、年代決定には不確定な部分も多いが中世の後半が中心と思われる。

これまで国術庵寺跡については、古代の瓦が散布することから寺院跡として知られていた。今回の調査では部分的に奈良・平安時代の遺構・遺物が確認できたものの、瓦の出土量が非常に少なく寺院跡を示すような状況ではなく、今後の調査で判断していく必要がある。

(坂口・山崎)

## 2. 国衙庚寺跡 - 4次調査 -

所在地 神代国衙字天王外  
事業名 市道徳長国衙線新設事業  
担当者 山崎裕司  
種別 本発掘調査  
調査期間 平成27年6月29日～9月4日  
調査面積 1,040㎡



調査の位置

### 1. 調査内容

調査地は三原平野の南部に位置し、南東から北西に緩やかに傾斜する。

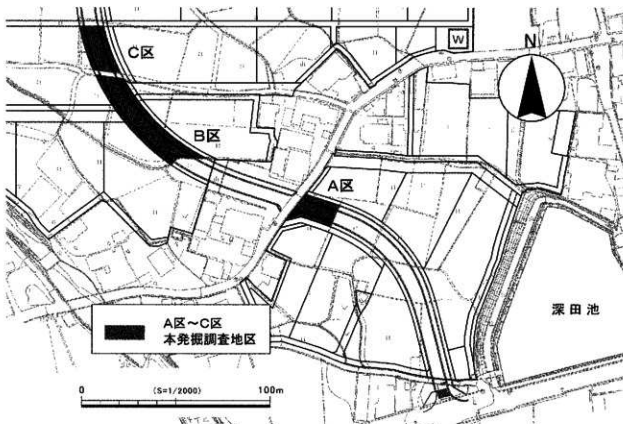
神代国衙地区で行われる泉宮園場整備事業の範囲内において新設市道が計画されたことから、平成25・26年度に園場整備事業に伴って行った確認調査の結果に基づいてA～Cの調査区を設定した。

[A区] (245㎡)

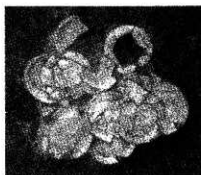
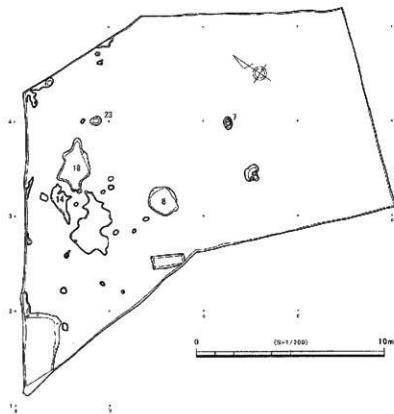
近世と中世と奈良時代の遺構を検出した。

土坑8からは18世紀頃と考えられる堺産のすり鉢片が出土している。

遺構23は土師器小皿12枚7～18が出土しており、祭祀関係と考えられる。正置された小皿が8枚、倒置が3枚、不明1枚で、一部積み重なっており、雑然とした置き方で特に規則性は感じられない。古銭やその他の遺物は出土しておらず時期は明確ではないが、小皿の底部外面に回転糸切痕が確認でき、

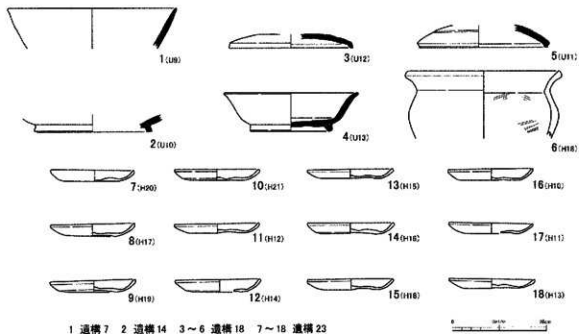


調査区設定図

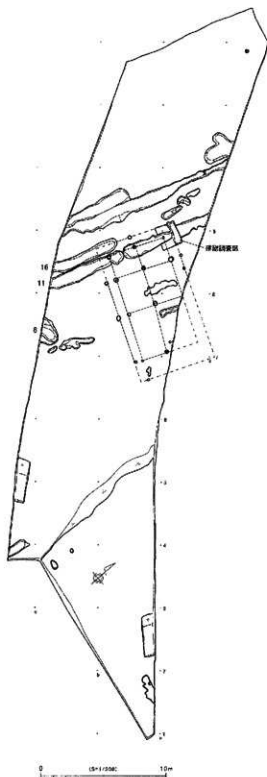


遺構23 遺物出土状況(北東より)

A区 平面図



A区 出土遺物



B区 平面図

極めて薄いつくりであることから、中世でも戦国時代に近い時期か、あるいは近世に入る可能性も考えられる。また土の下は3cmほどの窪みになっているが、自然地形の可能性もある。

自然地形の窪みと考えられる遺構18からは奈良時代頃と思われる須恵器坏B3～5や土師器甕6が出土している。

[B区] (531 m)

中世と思われる遺構を検出した。遺構や包含層からの出土遺物が極めて少なく時期は明確でない。

検出した掘立柱建物は総柱で方位はN 67° W、母屋部分は梁行2間(4.6 m) × 桁行3間(8.6 m)で面積は約39.6 m<sup>2</sup>、廂が四周に巡る比較的大規模の大きな建物である。

建物西側の溝は建物と同方位であるが、溝11・16は建物柱穴を切っているため、同時期ではない。

[C区] (264 m)

中世と思われる溝と柱列などを検出した。

溝3からは流れ込みの可能性もあるが瓦器碗19が出土しており、B地区の溝とほぼ平行していることから、中世の耕地を区画する溝と推定される。

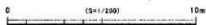
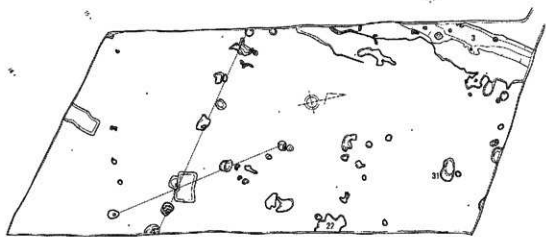
柱列はN 9° WとN 52.5° Wの方位を示す。

土坑31からは鎌倉時代頃と思われる土師器小皿22、遺構22からは奈良時代頃と思われる須恵器坏B蓋20と須恵器坏A 21が出土している。

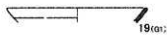
## 2. まとめ

検出遺構は比較的少なかったが中世を中心に祭祀遺構や掘立柱建物跡を検出した。

冨衝庵寺跡と関わるような遺構は確認できなかった。奈良時代の遺構は非常に少なく、中世の耕地開発の影響を大きく受けていると推定される。(山崎)



C区 平面图



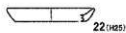
19(a1)



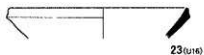
20(u17)



21(u18)



22(H25)



23(u16)



24(c2)

19 柄 3 20·21 遺構 22  
22 土坑 31 23·24 包含層



C区 出土遺物

### 3. 荒目遺跡－1次調査－

所在地 八木養宜<sup>やなぎ</sup>中<sup>なかつ</sup>字<sup>な</sup>荒目<sup>あらい</sup>外  
 事業名 農地整備事業（経営体育成型）他  
 担当者 的崎薫・定松佳重  
 種別 確認調査  
 調査期間 平成27年10月26日～11月4日  
 調査面積 56㎡（2×2m 14ヶ）



調査の位置

#### 1. 調査内容

本調査対象地は淡路島最大の平野である三原平野北東部の標高35～42mを測る養宜川左岸に位置する。対象地の西側には入田山古墳群や上八木古墳のほか、戒壇寺跡（古代）や養宜館跡（中世）など多くの遺跡が包蔵されている。

平成25年度に上記事業に伴って分布調査を行った結果、広範囲に遺物の散布が認められた。よって、地下の埋蔵文化財の有無を確認するため、遺跡範囲確認調査を行った。事業対象地の約半分は現在仮設駐車場であるため、耕作土が除去され、真砂土と砕石が敷かれていた。

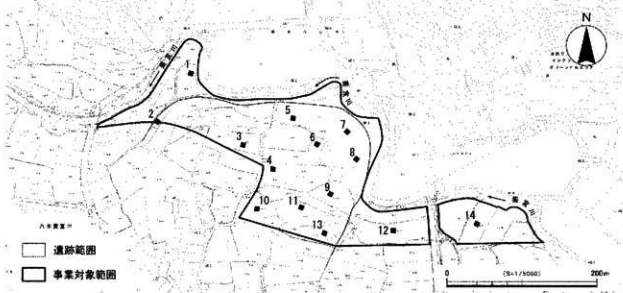
主な調査区のみ記述する。

No2 養宜川左岸段丘上に位置する。南西から段丘岸に向かう溝状の遺構（6層）を確認した。埋土には弥生土器やサヌカイトが含まれる。

No3 4層上面から掘り込まれる遺構（3層）を断面観察で確認した。4～6層は弥生時代中期末～後期初頭頃の遺物を多く含む黒褐色シルト質土の包含層である。

No5 南から北に走る溝状の遺構（4・5層）を確認した。4層には弥生時代と奈良時代末～平安時代初頭の遺物が含まれ、5層からは弥生時代の遺物が出土している。

No6 安定した黄色系の粘質土である4層をベースにして掘り込まれている溝と柱穴状の遺構を4基確



調査区設定図



認した。遺構から土師器がわずかに出土している。2層から奈良時代末～平安時代初頭の遺物が出土していることから、遺構もこの時期の可能性が高い。

№7 11層をベースにして南から北に走る溝(7～10層)を確認した。溝は幅1.6m以上、深さ0.7mで、7・8層には弥生時代中期後葉頃の遺物が多く含まれていた。

№8 遺構面を2面確認した。第1遺構面では平面と断面から柱穴状の遺構を検出し、弥生時代の土器が出土している。第2遺構面では柱穴状の遺構を検出したが、遺物は確認できなかった。この調査区の包含層と遺構からは弥生時代の遺物しか出土していないことから、遺構は弥生時代のものと考えられる。

№9 土坑を確認したが、遺物が出土していないため時代は不明である。包含層から古代と中世の遺物を確認した。

№10 5・6層をベースに柱穴状の遺構など(3・4層)を確認した。遺構から小片の土師質土器が出土しているが時期は不明である。包含層である2層からは土師器・須恵器・須恵質の布目痕がある平瓦が出土している。

№11 3～5層は遺物を多く含む包含層で、弥生時代中期後葉頃と奈良時代後半～平安時代初め頃の遺物が出土した。古代の遺物の中には丸底Ⅳ式の製塩土器が多く含まれる。7層をベースに柱穴状の遺構を確認したが、遺物は出土していない。

№13 仮設駐車場にする際に、重機などの走行によって上層は攪乱を受けていた。土坑を確認したが、遺物は出土していない。

№14 一番東側の調査区である。今回の調査では遺跡範囲外としたが、地山直上から扁平片刃石斧が出土している。この調査区の南東方向に生活を営むのに好条件である微高地があり、そこから流れ込んだ可能性がある。

## 2. まとめ

今回の調査で、事業対象地において広範囲にわたって遺構と包含層を確認した。事業対象地の南西方向にある住宅密集地は微高地に立地し、そこから続く微高地の張り出し上に遺跡が広がっている。遺跡の時代はほぼ全域で弥生時代中期後葉～後期初頭頃と奈良時代～平安時代初頭頃の大きく2つの時代を確認した。柱穴状の遺構を確認しているが、調査面積が小さいことから、建物を構成する遺構であるかは不明である。おそらく集落の中でも中心部ではなく、緑辺部に近い場所と考える。№2・5・7では溝を確認し、すべて養宜川の方へ向かっていることから、集落から川に水を流す排水的役割のあった溝の可能性もある。また、古代の遺物には、内陸部でありながら丸底Ⅳ式の製塩土器がやや多く含まれている。おそらく、堅塩として土器ごと沿岸部から運ばれ、消費されたものとする。これらの時代以外には№3・9で中世の遺物をわずかに確認していることから、今後、養宜館に関連する中世の遺構が見つかる可能性が考えられる。

(的崎)

No.2



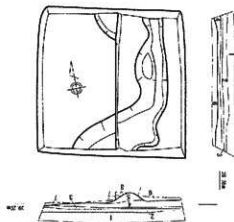
1. 耕作土
2. 3+5層(混在)
3. 褐色黄褐色 7.5YR3/2シルト質土  
(遺物・φ10cm以下層まばらに含む)
4. 黄褐色 7.5YR2.5/2シルト質土
5. 灰黄褐色 10YR4/2土
6. 褐色灰褐色 7.5YR4/2粘砂質土  
(遺物・φ5~10cm層まばらに含む)
7. 黄褐色 10YR5/8+にふい黄褐色 10YR7/2粘質土

No.3



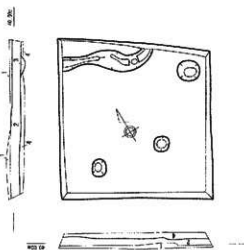
1. 耕作土
2. 黄褐色 7.5YR3/2シルト質土(遺物含む)
3. 黄褐色 7.5YR2/2シルト質土
4. 黄褐色 7.5YR3/2+黄褐色 7.5YR2/2シルト質土(遺物含む)
5. 黄褐色 7.5YR3/2+褐色 7.5YR4/6シルト質土(遺物含む)
6. 黄褐色 7.5YR3/2シルト質土  
灰黄褐色 10YR5/2土ブロック多く含む
7. 褐色灰黄褐色 10YR4/2土(遺物・φ1~10cm層多く含む)
8. 黄褐色 10YR5/6粘質土

No.5



1. 灰黄褐色 10YR4/2土+6層ブロック含む(客土)
2. にふい黄褐色 10YR4/2.5粘砂質土
3. にふい黄褐色 10YR4/3粘質土
4. 黄褐色 10YR3.5/2粘砂質土(遺物・多多く含む)
5. 灰黄褐色 10YR5/2シルト質土(遺物わずかに含む)
6. 黄褐色 2.5Y5/6粘砂質土(混含む)
7. 褐色黄褐色 2.5Y5/4粘砂質土(混・φ5cm以下層・腐り層含む)
8. 褐色灰黄褐色 10YR5/2.5粘細砂質土(φ5cm以下層・腐り層多く含む)

No.6

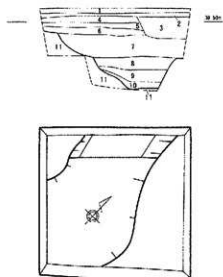


1. 耕作土
2. 黄褐色 10YR3.5/2.5粘砂質土  
(遺物・φ2cm以下層り層まばらに含む)
3. にふい黄褐色 10YR5/2シルト質土
4. 黄褐色 2.5Y5/4+黄褐色 2.5Y7/4粘質土(混含む)

0 (5m/100) 2m

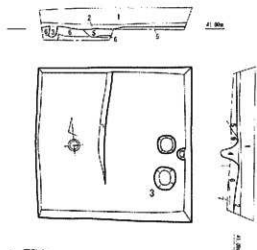
調査区断面・平面図

No.7



1. 真砂土
2. オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土
3. 埋込
4. 褐色10YR4/5粘砂質土(φ3cm以下埋わずかに含む)
5. にぶい黄褐色10YR5/2シルト質土(遺物含む)
6. 灰黄褐色10YR5/2シルト質土(遺物・灰含む)
7. にぶい黄褐色10YR5/3粘砂質土(遺物・灰含む)
8. にぶい黄褐色10YR5/3シルト(遺物・灰含む)
9. にぶい黄褐色10YR5/4粘砂
10. 褐色10YR4/4粘砂
11. 明黄褐色10YR6/8粘砂質土(灰含む)

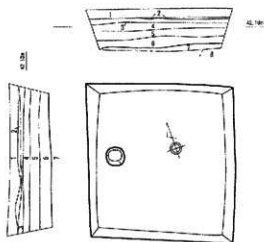
No.10



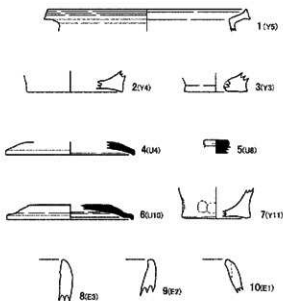
1. 真砂土
2. 黄褐色7.5YR2/2シルト質土(遺物含む)
3. オリーブ褐色2.5Y4/3シルト質土(灰まばらに含む)
4. 褐色7.5YR2/1シルト質土+6層ブロックまばらに含む(φ3cm以下埋まばらに含む)
5. 暗灰黄色2.5Y4/2シルト質土(φ1cm以下埋り層まばらに含む)
6. オリーブ褐色2.5Y4/3粘砂質土
7. 黄褐色2.5Y5/6+暗灰黄色7.5Y2/2粘質土

0 (S=1/80) 2m

No.11



1. 真砂土
2. 埋込土
3. 黄褐色7.5YR2/2シルト質土(遺物含む)
4. 黄褐色10YR2/2シルト質土(遺物含む)
5. 黄褐色10YR1/2シルト質土(遺物・φ2-5cm張り層まばらに含む)
6. 暗黄褐色10YR2/1シルト(φ2-5cm張り層多く含む)
7. 黄褐色10YR2/2シルト(φ5cm以下埋り層まばらに含む)
8. 暗黄褐色7.5YR2/1シルト質土(φ5cm以下埋り層多く含む)



1~3 No.3 4~6層 5 No.11 3~4層  
4 No.5 4層 6~10 No.11 5層

0 (S=1/4) 10cm

調査区断面・平面図・出土遺物

## 2項 平成28年度調査

### 4. 国衙廃寺跡 - 5次調査 -

所在地 神代国衙字天王外  
事業名 経営体育成基盤整備事業（国衙地区第3工区）  
担当者 坂口弘貴・山崎裕司  
種別 本発掘調査  
調査期間 平成28年5月23日～12月28日  
調査面積 3,086.5㎡



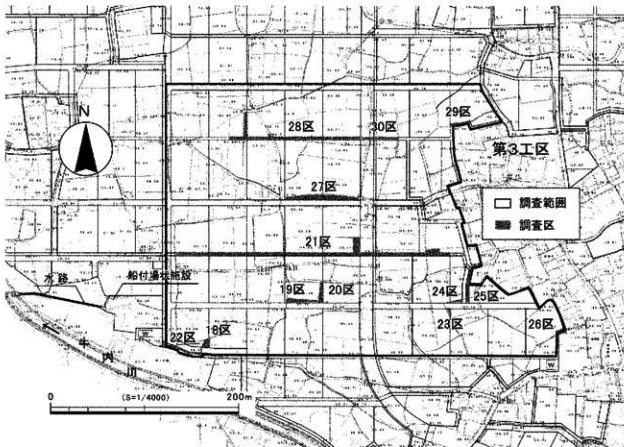
調査の位置

#### 1. 調査内容

本調査は、神代国衙・賀集立川瀬地区で計画されている県営圃場整備事業に伴う調査である。

調査地は、三原平野中央南寄りの南東～北西方向に緩やかに傾斜する水田などからなり、南側を牛内川が流れる。調査地北西部には塚ヶ洞遺跡（縄文・弥生・奈良・平安時代・中世）、北部には木辺遺跡（縄文・弥生・古墳・奈良・平安時代・中世）などが分布する。今回の工事範囲である北東部の第2工区が長手遺跡、南部の第3工区が国衙廃寺跡として遺跡登録されている。

調査は、平成25・26年度に行った確認調査結果に基づき、地下の文化財に影響が及ぶ排水路・圃場



調査区設定図

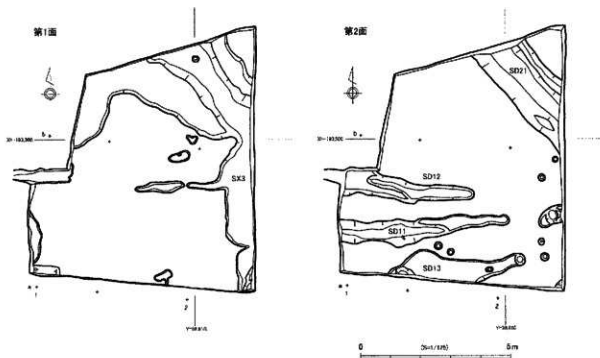
部分を対象に重機・人力併用で進めていった。なお調査区名は、平成 27 年度の調査（1～17 区）に引き続き 18～30 区を設定して行った。以下主な調査区の概要を記す。

[18 区]

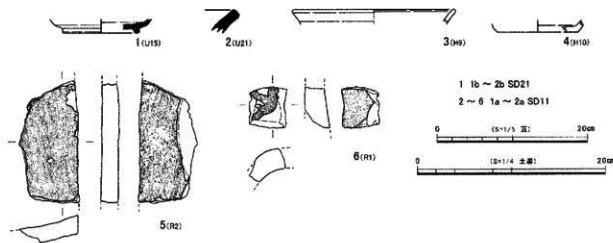
調査地南西部に位置する岡場部分の調査区である。調査面積 51.2 m<sup>2</sup>。

遺構面を 2 面確認した。第 1 面の遺構には、浅い落込み SX3 などがある。調査区北東部が南東～北西方向にのびる溝状の遺構となっており、第 2 面の溝 SD 21 が形成されて以降継続して溝として機能していたと考えられる。遺物は土師器、須恵器などがあり、埋土の色調から中世と思われる。

第 2 面の遺構には、溝や小穴などがある。南半部の溝 SD 11・12・13 は深さ約 20 cm で浅い。北東部



18 区 平面図



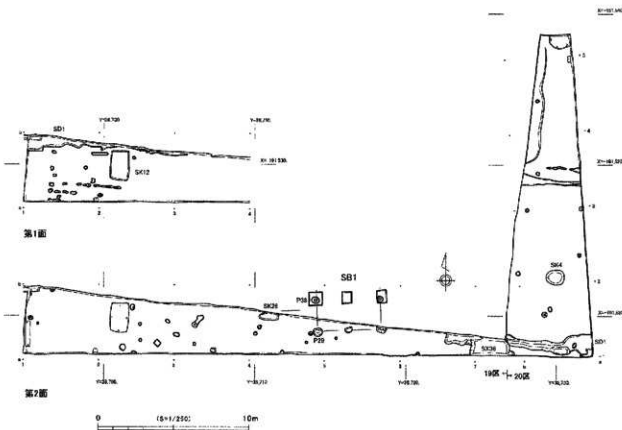
18 区 出土遺物

の溝SD 21は深さ約60cmを測る。遺物は須恵器1・2、土師器3・4などがあり、奈良時代後半～平安時代前半と思われる。その内SD 11から平瓦5と丸瓦6が1点ずつ出土している。

[19区]

調査地中央南寄りに位置する圃場部分の調査区である。調査面積91.5㎡。

西部では遺構面が2面となり中央部～東部では遺構面が1面となる。第1面の遺構には小穴、溝、土坑がある。SD 1・SK 12が中世で、それ以外の遺構は近代が中心と思われる。第2面には掘立柱建物、



19・20区 平面図



19区 7-8 4a SK26 9 SB1(4a P38) 10 4a 遺物包合層



20区 11~13 1a~2a SK4

19・20区 出土遺物

土坑、溝、小穴などがある。第1・2面ともに全体的に遺物は少ない。

SB1 4a～5a区に位置する掘立柱建物で北側にのびると考えられる。東西2間(4.2m)、南北1間(2.1m)以上の側柱建物で、P29-38を基準にした方位は座標北に対し $N4^{\circ}W$ を示す。遺物は須恵器9や周辺の遺物包含層から製塩土器10が出土しており、奈良時代後半と考えられる。

SK26 4a区に位置する土坑で、長さ1.3m、幅約45cm、深さ約20cmを測る。遺物は土師器、須恵器、瓦器7・8が出土しており、鎌倉時代と考えられる。

#### [20区]

調査地中央南寄りに位置する圓場面の調査区で19区東側に隣接する。調査面積87.4㎡。

遺構・遺物ともに非常に少ないが、土坑、溝、小穴などがある。

SK4 1a～2a区に位置する土坑で、長辺1.2m、短辺1.0m、深さ40cmを測る。遺物は須恵器11、土師器12・13、瓦器が出土しており、鎌倉時代と思われる。

SD1 調査区南部に位置する東西方向の溝で、最大幅約1.5mを測る。遺物は土師器、磁器(染付)などが出土しており、近世と考えられる。19区東端にあるSX36と関連があると思われる。

#### [21区]

調査地中央部に位置する東西方向の排水路及び圓場面の調査区である。調査面積1,363.8㎡。

調査区西半部の1a～23a区にかけては、近世頃の溝や小穴が中心で遺構・遺物ともに非常に少ない。一方東半部については、近世以前の遺構が確認できるようになり、遺物の出土量が多くなる。24a～36a区にかけては遺構面が2面となる。ただし旧地形が谷地形になるため、両遺構面とも自然の流路状の遺構や谷地形などが中心で、居住域ではなかったと思われる。37a区付近から東は微高地になるようで、中世の掘立柱建物(SB2～6)が5棟あまり確認できた。また部分的に古代の遺物を含む小さな谷地形SX293・340が存在することが分かった。中世の建物跡は、この小さな谷地形と一部重複しており、谷地形が埋没してから構築される。調査区東端部の56a区以東は出土遺物がほとんどなくなり、遺構が確認できなくなる。

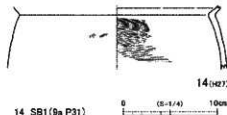
SB1 9a～10a区に位置する掘立柱建物で南側にのびると考えられる。東西1間(3.5m)、南北1間以上(2.0～2.1m)で、P44-41を基準にした方位は座標北に対し $N2^{\circ}W$ を示す。遺物は土師器14が出土しており、平安時代中葉と思われる。

SB2 38a～39b区に位置する掘立柱建物で西側にのびると考えられる。南北2間(3.85～3.9m)、東西2

間(5.0～5.1m)以上の総柱建物で、北・東・南方向に廂を有する。P214-202を基準にした方位は座標北に対し $N89.5^{\circ}W$ を示す。廂を構成すると思われる柱穴P200からはほぼ完形の土師器皿51や、他の柱穴から土師器49・50、瓦器などが出土しており、鎌倉時代と考えられる。

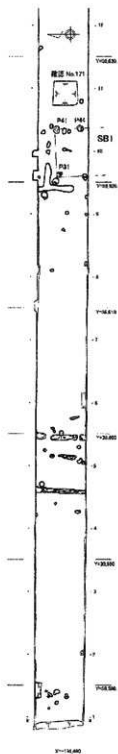
SB3 38a～39a区に位置する掘立柱建物で南側にのびると考えられる。東西2間(3.05m)、南北1間以上の建物で、北側の柱列は廂の可能性はある。P186-90を基準にした方位は座標北に対し $N89.5^{\circ}W$ を示す。時期は鎌倉時代と思われる。

SB4 40a～41a区に位置する掘立柱建物で北側にのびると考えられる。南北1間以上、東西2間(6.1m)の規模で、P219-346を基準にした方位は座標北に対し $N90^{\circ}E$ を示す。時期は鎌倉時代と

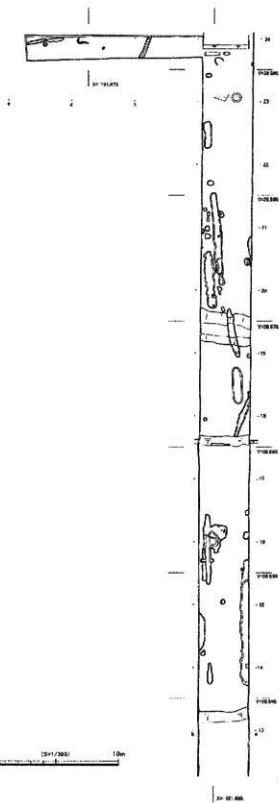


14 SB1(9a P31)

#### 21区 出土遺物 1



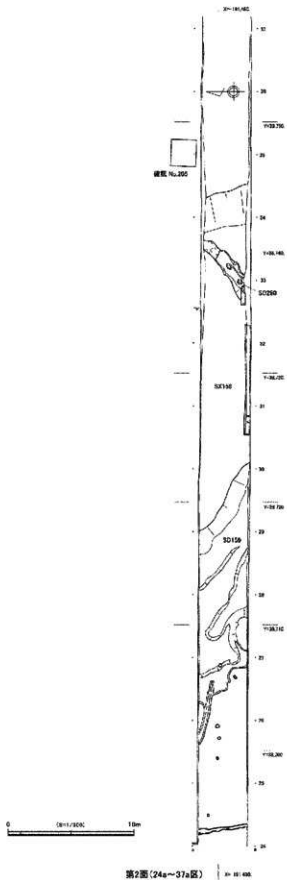
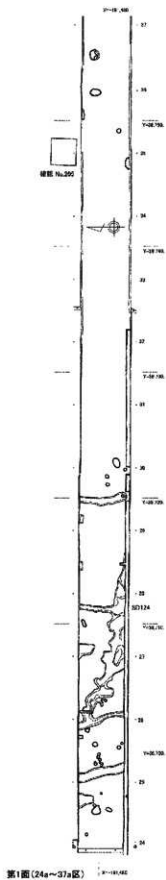
1a~12a区



12a~23a区

21区 平面図 1





21 区 平面圖 2

思われる。

S B 5 49 a ~ 50 a 区に位置する掘立柱建物で北・南側にのびる可能性がある。南北1間(2.15 ~ 2.35 m)以上、東西3間(7.6 m)の総柱建物と思われ、東側に扉又は欄状の柱穴を有する(S A 1)。P 323-331を基準にした方位は座標北に対しN 1° Wを示す。柱穴からは須恵器 63、土師器 64・65 などが出土しており室町時代と思われる。また西側にあるSD 312が区画の溝になる可能性が高い。

S B 6 51 a ~ 52 a 区に位置する掘立柱建物で北側にのびると思われる。南北1間以上、東西2間(5.15 m)の規模で、P 354-334を基準にした方位は座標北に対しN 88.5° Eを示す。出土遺物はないが西側のS B 5と傾きが同じであることから同時期の建物になる可能性が高い。建物南に位置するP 332から土師器皿 66と咸平元寶または治平元寶1枚が出土した。

SD 124 25 a ~ 28 a 区に位置する。第1面で確認した南東~北西方向にのびる自然流路状の遺構である。乱れた形状で幅は一定ではなく、深さ約20 cmを測る。遺物は須恵器 15、土師器 16 ~ 18、製塩土器など古代の遺物が中心に出土しているが、時期は中世と思われる。これは下層の古代の遺物を多く含む遺構S X 156の遺物が混入したと考えられる。

S X 156 26 a ~ 34 a 区付近に位置する第2面で確認した幅約38 mの大きな谷地形である。最大の深さ約1.0 mを測る。調査区幅が狭いため分りにくいが、南東方向~北西方向にのびると思われる。遺物は中央部が少なく、谷地形の肩部から古代の遺物が多く出土しており、須恵器 19・21 ~ 25・33 ~ 40、土師器 26 ~ 32・41、製塩土器 20・30・42などがある。製塩土器は完形に復元できるものや全体の形が分かるものが幾つかあり、いずれも底部が尖底をなす丸底IV式に分類されるタイプで、上層は器壁が厚く、下層は器壁が薄い傾向が認められる。また土師器には畿内系の土師器が含まれる。時期は奈良時代中葉~平安時代初頭と考えられる。

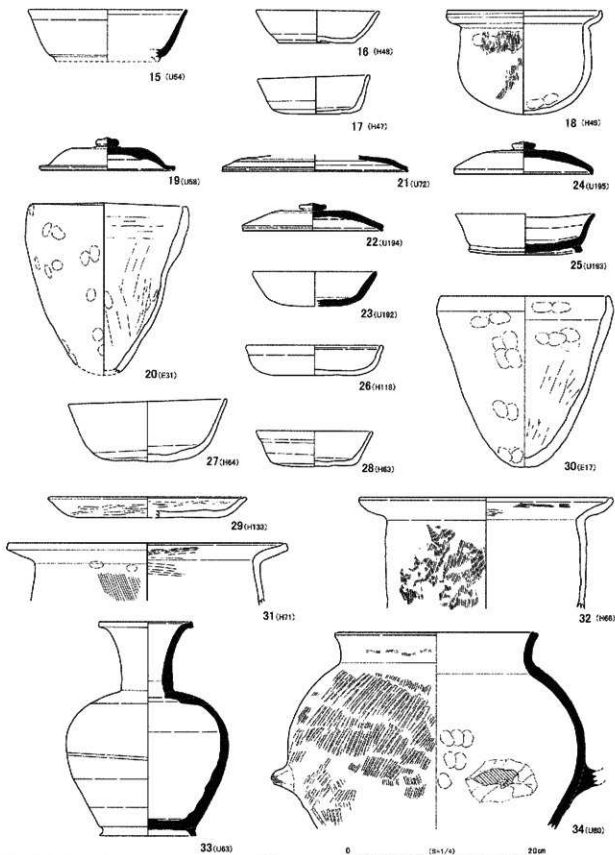
SD 159・290 SD 159は28 a ~ 30 a 区、SD 290は32 a ~ 33 a 区に位置する溝状の遺構である。大きな谷地形S X 156の底部が部分的に窪む形状で、後者は流水していたと思われる。SD 290から弥生時代中期前半の土器 43 ~ 48が出土している。

S X 293 38 a ~ 39 c 区に位置する小さな谷地形である。遺構の削平がなかったため、東側のサブトレレンチのみの掘削とした。幅約6.0 ~ 8.0 m、深さ75 cmで基本的に東西方向にのびるが、北東部分が1.0 ~ 1.3 mの幅で溝状の遺構が北方向にのびる。遺物は須恵器、土師器 53、製塩土器 54など奈良時代の遺物が出土している。

SD 340 43 a ~ 46 a 区に位置する溝状の遺構である。幅約12 m、深さ約1.4 mを測り、南東~北西方向にのびる。遺物は奈良~平安時代の須恵器 56・57・59・60、土師器 55・58、製塩土器 61・62が出土している。製塩土器 61は壘形をなす。先のS X 293と繋がるかは不明。

SD 367 54 a ~ 54 b 区に位置する南北方向の溝である。幅約25 cm、深さ約10 cmを測る。遺物は土師器 67 ~ 69、瓦器 70などが出土しており、鎌倉時代と思われる。この溝を境に東側には遺構・遺物が少なくなる傾向がある。

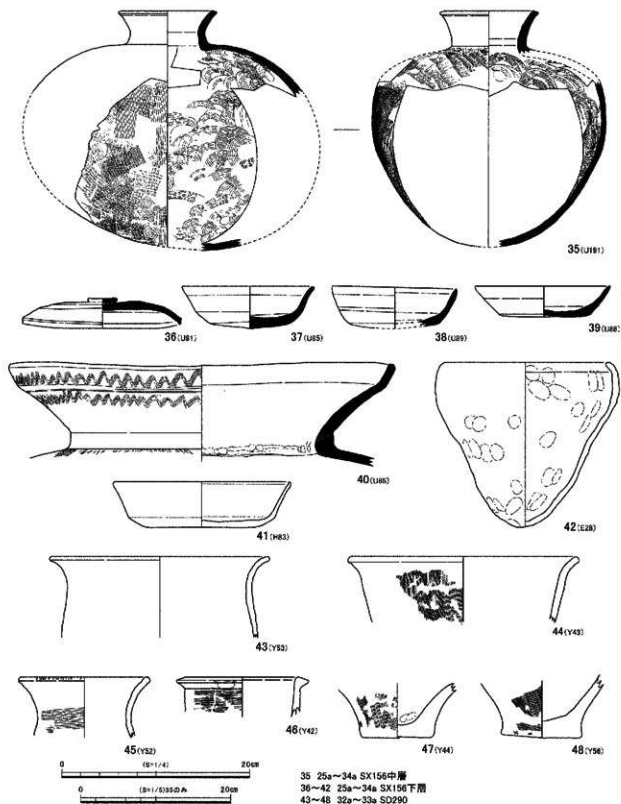
P 259 38 c 区、S B 2の北側に位置する小穴である。長辺50 cm、短辺30 cm、深さ約20 cmを測る。ベースが古代の遺物を含むS X 293のため、奈良時代の須恵器壺 52が出土しているが、埋土の色調から中世の遺構と考えている。



15~18 25a~28a SD124

19~20 25a~34a SX156上層  
21~34 25a~34a SX156中層

21区 出土遺物2

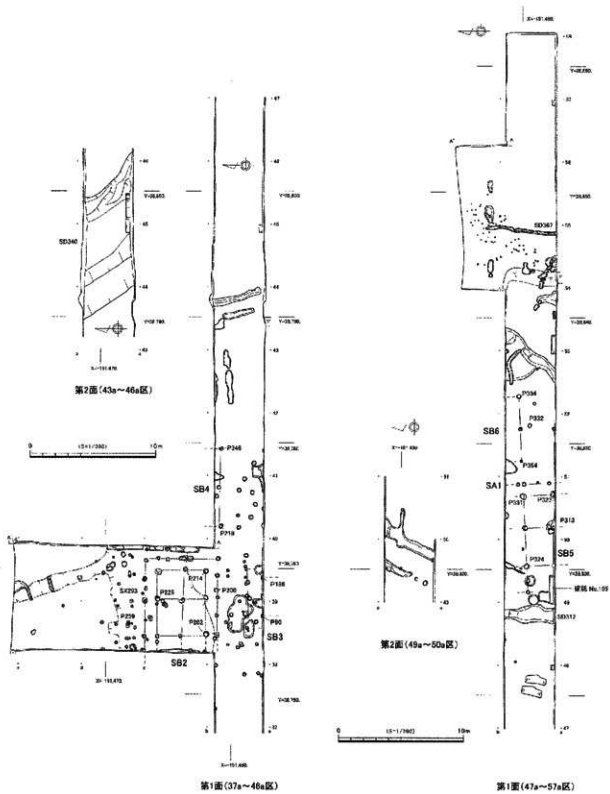


21区 出土遺物 3

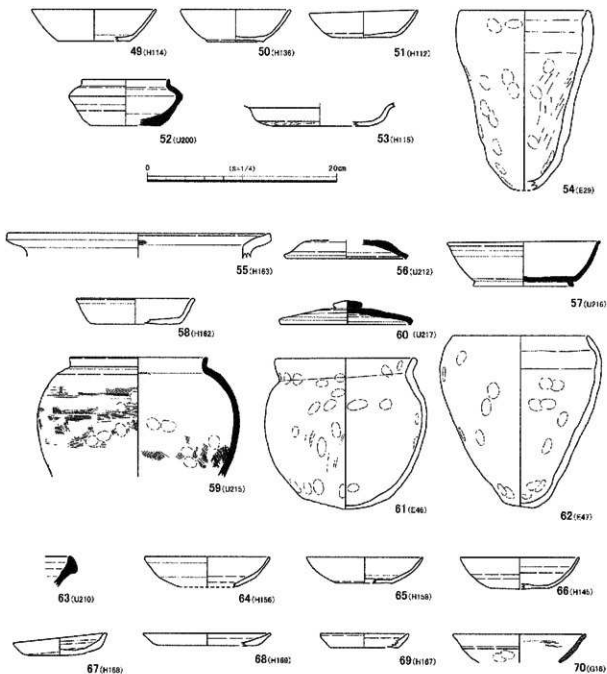
[27区]

調査地中央部に位置する園場部分の調査区である。調査面積 350.8 m<sup>2</sup>。

中央付近の掘立柱建物は、東西7間 (14.0 m) ・南北3間 (5.0 m) 以上となり、極めて規模の大き



21区 平面図3



49 SB2(39a~39b P214)  
50 SB2(38b~38c P229)  
51 SB2(39a P200)  
52 38c P259

53-54 38a~38c SX293  
55 43a~46a SD340上層  
56~59 43a~46a SD340中層  
60~62 43a~46a SD340下層

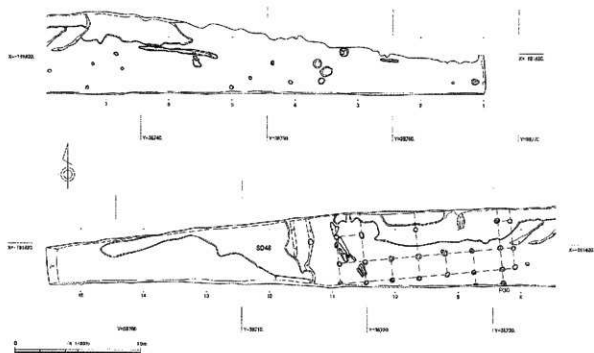
83 SB5(50a P313)  
84 SB5(45a P324)  
85 SB5(50a P331)  
86 51a P332

67~70 54a~54b SD387

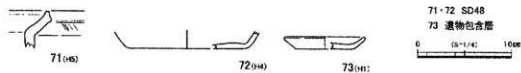
#### 21区 出土遺物4

な建物である。南側の1間、西側の1間および突出部分、柱間の狭い東側の1間分は廂と推定される。座標北に対してN 84.5° Eを示す。柱穴P 30から瓦器片、8ブロックの包含層から土師器小皿73が出土しており、13世紀頃の建物と思われる。

建物の西側の自然流路SD 48は、盛土で保護されるため、検出と一部の掘削に留めたが、奈良時代



27区 平面図



27区 出土遺物

頃の土師器皿 72 や土師器鍋 71 が出土した。

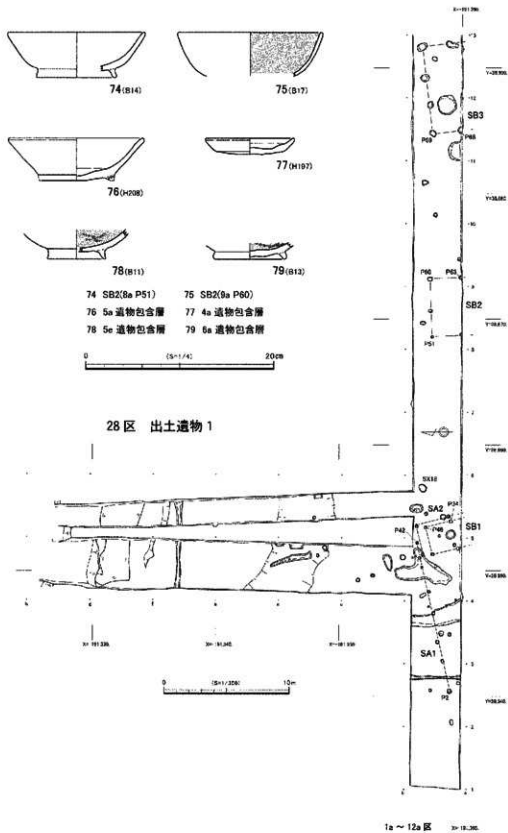
[28区]

調査地北部に位置する東西方向にのびる排水路と圍場部分を中心とした調査区である。調査面積 730.6 m<sup>2</sup>。

掘立柱建物、溝、土坑、谷地形などが確認できた。また 20 a ~ 27 a 区にかけては、遺構面が 2 面となり、谷地形 S X 153 の埋没後に中世の建物が建築される。

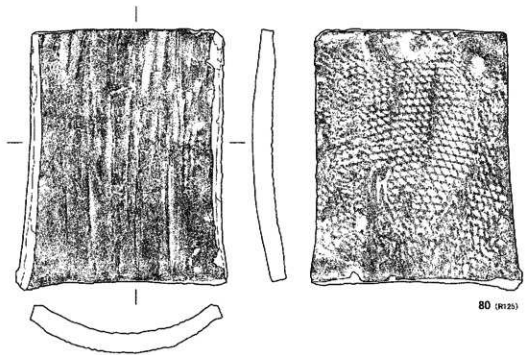
S B 1・S A 1・2 4 a ~ 5 a 区にかけて位置する掘立柱建物で南側にのびると思われる。南北 1 間 (2.1 m) 以上、東西 1 間 (2.2 ~ 2.25 m) で、北側と東側に扉状の区画施設 S A 1・2 が想定される。P 34-46 を基準にした方位は、座標北に対し N 13.5° W を示す。周辺から土師器 76・77、黒色土器 78・79 が出土しており、平安時代中葉と思われる。建物北西部に東西 7 間程度 (21.0 m) の柵列又は柱列 S A 1 がある。P 2-42 を基準にした方位は S B 1 に直行し、座標北に対し N 77.5° E を示す。さらに建物の 3 m 東には、完形の平瓦 2 枚 80・81 の凹面側を重ねた遺構 S X 18 がある。2 枚の平瓦の凸面には、小さな格子タタキが残る。

S B 2 8 a ~ 9 a 区に位置する掘立柱建物で南側にのびる。南北 1 間 (2.35 ~ 2.5 m) 以上、東西 2 間 (4.6 m) の側柱建物で、P 63-60 を基準にした方位は座標北に対し N 2° W を示す。遺物は土師

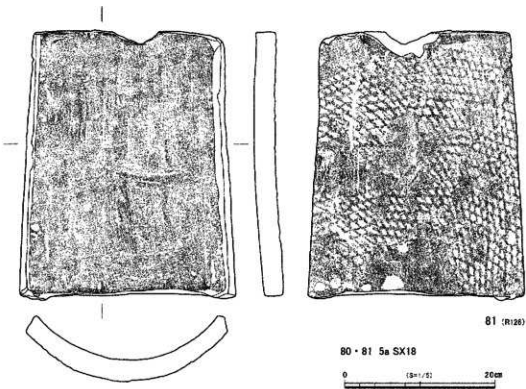


28区 平面図 1



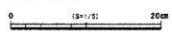


80 (R125)

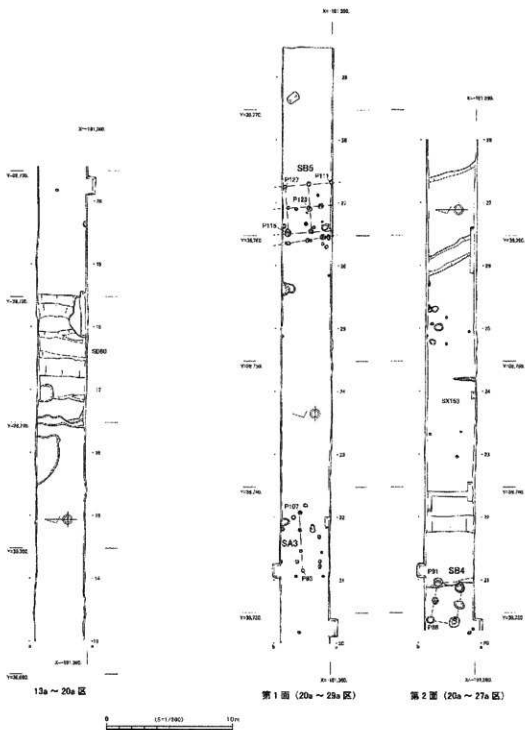


81 (R126)

80・81 5a SX18



28区 出土遺物 2

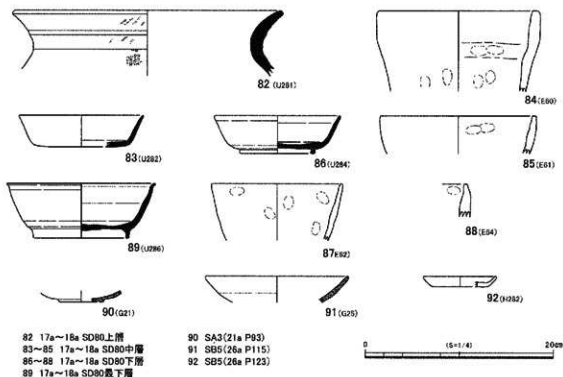


28区 平面図2

器 74. 黒色土器 75. 瓦が出土しており、平安時代中葉と考えられる。

SB 3 11 a ~ 12 a 区に位置する掘立柱建物で南側にのびる。南北1間 (2.25m) 以上、東西3間 (6.9 m) の側柱建物で、P 68-69 を基準にした方位は座標北に対し  $N 5^{\circ} W$  を示す。遺物は非常に少ないが上師器が出土しており、平安時代中葉と思われる。

SB 4 20 a ~ 21 a 区に位置する第2面で確認した掘立柱建物で北側にのびる可能性がある。南北1



### 28区 出土遺物3

間 (1.8~1.9 m)、東西2間 (2.8~3.0 m) の側柱建物と思われ、P 91-86 を基準にした方位は座標北に対しN 78° Wを示す。遺物は少ないが土師器、製塩土器片が出土しており、奈良~平安時代と思われる。

SB 5 26 a~27 a 区に位置する第1面で確認した掘立柱建物で北・南側にのびる可能性がある。南北2間 (3.75 m) 以上、東西2間 (3.7~3.75 m) の総柱建物で、西側に櫛状の柱列を有する。P 111-127 を基準にした方位は座標北に対しN 6° Wを示す。遺物は土師器 92、須恵器、瓦器 91 が出土しており、鎌倉時代と思われる。

SA 3 21 a~22 a 区に位置する第1遺構面で確認した柱列である。建物を構成する柱穴の可能性が残るが調査区内では、北・南側には対応する柱穴が確認できない。東西3間 (4.6 m) でP 93-107 を基準にした方位は座標北に対しN 87.5° Eを示す。遺物は土師器、須恵器、製塩土器、瓦器 90 が出土しており、鎌倉時代と考えられる。

SD 80 16 a~18 a 区に位置する溝である。幅 8.3 m、深さ約 1.1 m を測り、南から北方向にのびる。遺物は須恵器 82・83・86・89、土師器、製塩土器 84・85・87・88 などが出土しており、奈良時代後半~平安時代初頭と考えられる。

SX 153 20 a~27 a 区に位置する谷地形である。幅 39 m、深さ 65 cm を測る。湧水が多い。遺物は土師器、須恵器、製塩土器片などがわずかに出土している。谷内の 24 a~25 a 区周辺に小穴が認められるが、深度が浅いため、明確に遺構になるかは不明である。遺物は製塩土器、土師器片がわずかに出土しており、奈良時代と思われる。

## 2. まとめ

第3工区の国衙廃寺跡については、弥生・奈良・平安時代、中世の遺構・遺物を確認することができた。弥生時代の遺構は、21区の部分的な確認であるが、周辺に小規模な集落が存在する可能性が出てきた。

奈良・平安時代については、自然地形の変化に伴うものが多いものの、掘立柱建物などが散在する形で確認できた。ただし窪地となっていた谷地形や溝からは、遺物が比較的まとまって出土していることから、周辺には同時代の建物群が存在する可能性が高い。また出土遺物の中に瓦が含まれることが注意される。主に瓦は、調査地北部(28区)周辺で出土しており、瓦葺き建物が存在した可能性が非常に高いと考えられる。軒瓦は認められず、丸・平瓦のみで詳細な年代は分かりにくい。平瓦凸面の調整は、小さな格子が施されたものが多く、谷内の奈良～平安時代初頃の遺物とは共伴しないと思われ、年代的には平安時代中葉に位置付けられよう。これまでの調査から国衙廃寺跡の性格を判断するのは難しいが、出土遺物の瓦に軒瓦が含まれていないことや調査地西側には、地元で“とらふら御門の洞”と呼ばれる長さ約30m、幅10mの牛内川と水路で結ばれた小さな洞が残っており、船着場の機能を想定することを考慮すれば、寺院というより官衙的な性格を考慮する必要が生じてきたといえる。

中世の遺構や建物は、中央部から東部を中心に分布しており、奈良・平安時代同様部分的に集落が広がると思われる。

(坂口・山崎)



船着場跡の施設(東から)

## 5. 国衙廃寺跡 - 6次調査 -

所在地 神代国衙字天王外  
 事業名 市道徳長国衙線新設事業  
 担当者 山崎裕司・坂口弘貴  
 種別 本発掘調査  
 調査期間 平成28年6月2日～平成29年2月1日  
 調査面積 2,181.6㎡



調査の位置

### 1. 調査内容

調査地は三原平野の南部に位置し、南東から北西に緩やかに傾斜する。

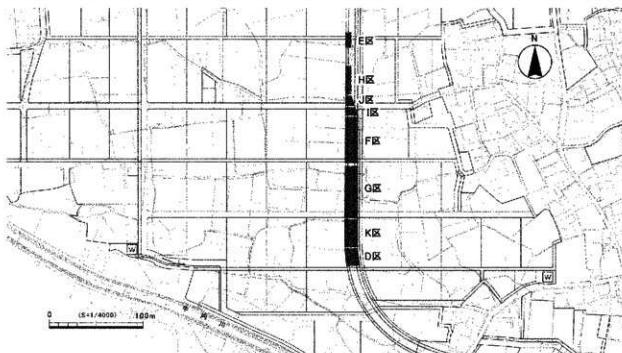
神代国衙地区で行われる県営圃場整備事業の範囲内において新設市道が計画されたことから、平成25・26年度に圃場整備事業に伴って行った確認調査の結果に基づいて調査区を設定し、D～Jのアルファベット順に調査を行っていった。

北側の調査区E・H区は遺構面・包含層は確認できず包蔵地の範囲外と考えられる。以下主要な調査区について説明する。

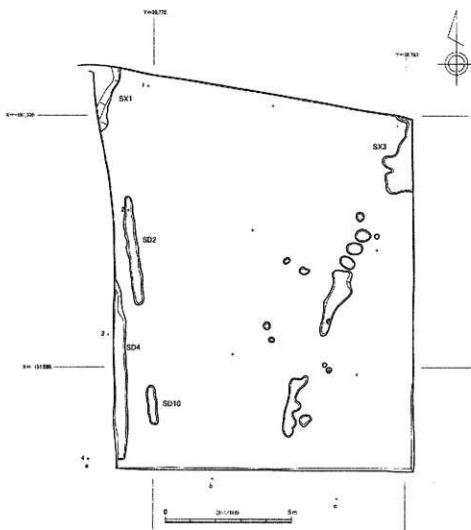
[D区] (181.3㎡)

調査地南端部に位置する調査区である。

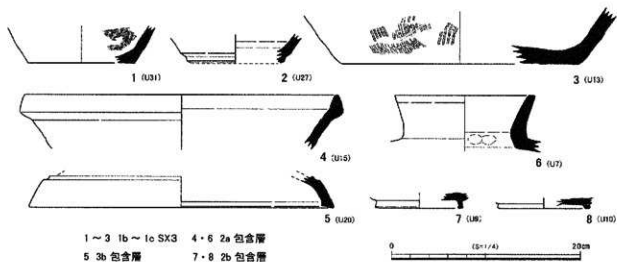
奈良・平安時代のベースとなる黒色系の土層が南から北方向に傾斜する。確認した遺構は、溝状の遺構や自然の窪み状の遺構で、居住域を示すような遺構ではない。ただしベースの上に堆積する土層には奈良・平安時代の遺物5～8が含まれており、摩滅が少ないものが含まれることから、周辺には同時代の遺構が分布する可能性がある。また5は円面硯の一部と考えられ注意される。西端部のSX1、SD



調査区設定図

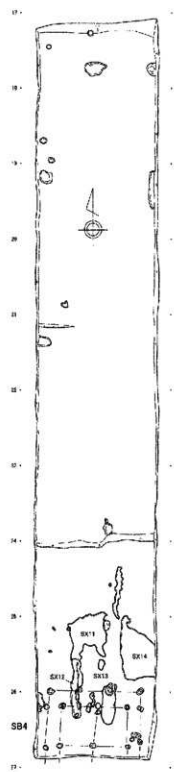


D区 平面图

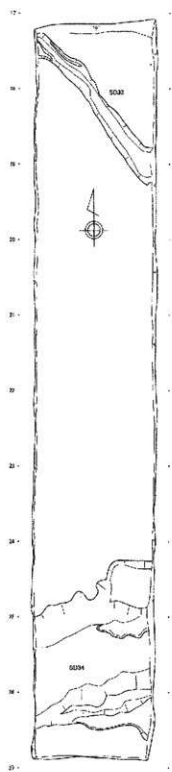


1~3 1b~1c SX3 4~6 2a 包含層  
5 3b 包含層 7~8 2b 包含層

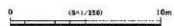
D区 出土遺物



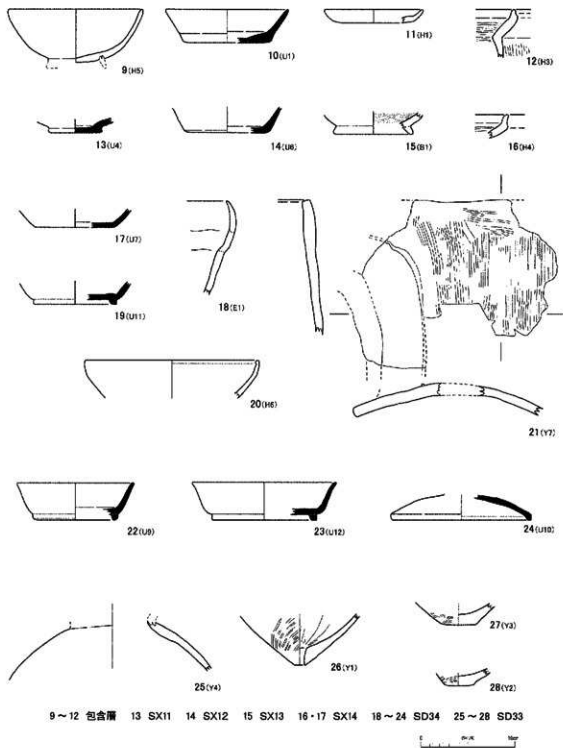
第1透視圖



第2透視圖



F区 平面圖



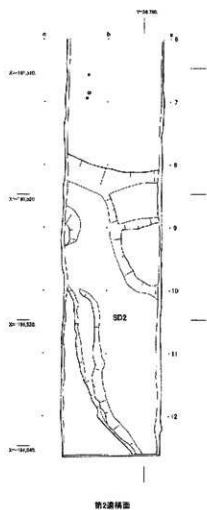
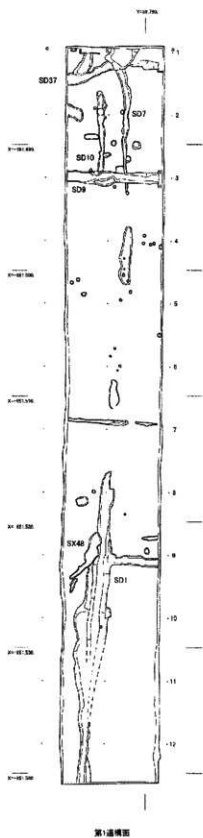
#### F区 出土遺物

2・4、SD 10は中世の遺構と考えられる。北東部のSX 3は、浅い窪み状の遺構で奈良時代の須恵器1〜3等が出土している。

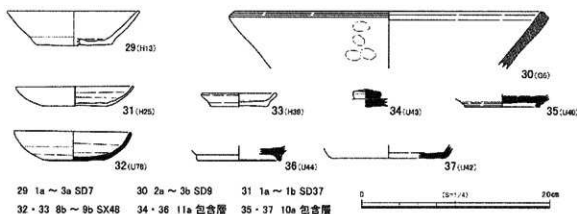
[F区] (784.4 m)

G区の北に位置する調査区である。ほぼ同じ高さであるが、遺構面を2面確認した。





G区 平面图



### G区 出土遺物

第1遺構面では、調査区南端で梁行2間×桁行1間以上の総柱建物SB4を検出した。この南側の5次調査21区で建物の続きを検出しており、桁行は2間で四囲に廂が付く構造と推定される。ほぼ正南北の方位を示す。柱穴からの出土遺物は無いが、周囲の包含層や窪み状のSX11~14から平安時代後半と推定される土師器埴9、土師器小皿11、須恵器杯10・14・17、黒色土器埴15等が出土している。

第2遺構面では、調査区南端で西から東方向に流れる旧河道SD34が検出されており、下層から奈良時代前半頃と思われる須恵器杯B19・22~24や丸底IV式の製塩土器18等が出土している。また調査区北端では北西から南東方向に流れる直線的な溝SD33が検出されており、弥生時代後期後半~終末期の上器25~28が出土した。

#### [G区] (829 m)

F区とK区の間位置する調査区である。

調査は、工事用車両の通行が可能なように複数回に分けて進めた。調査区内の明黄色系~礫混黒色系のベースが南から北方向に傾斜する。南半部には暗褐色系の土層と黒褐色系の土層が堆積しており、両層から須恵器、土師器、製塩土器等奈良・平安時代の遺物が出土している。遺構面が2面確認できた。確認した遺構は溝等が中心で、居住域を示すような遺構はない。

SD1 調査区南半部に位置する第1面で確認した溝である。最大幅約2.9m、深さ56cmを測る。南北方向の溝に9a区付近で東側に直行する形で幅約80cmのやや狭い溝が取り付く。遺物は土師器、須恵器、製塩土器等奈良・平安時代の遺物に混じって瓦器片がわずかに出土しており、中世と思われる。

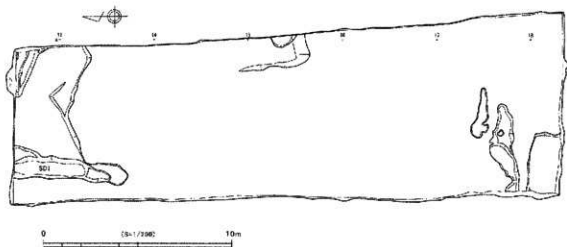
SD2 調査区南半部に位置する第2遺構面で確認した溝状の遺構である。南東~北西方向にのびる。遺物は非常に少なく、土師質の上器片がわずかに出土しており、奈良時代の可能性がある。

SD7 1a~3a区に位置する溝である。最大幅70cm、深さ10cmで南北方向にのびる。須恵器、土師器29、製塩土器、瓦等に混じって瓦器片が出土しており、SD1同様中世と思われる。

SD9 2a~3b区に位置する溝である。最大幅1.2m、深さ25cmで南北方向にのびて先のSD7・10に直行する形で切っている。遺物は須恵器、瓦質土器30等が出土しており、中世と思われる。

SD10 1b~2b区に位置する溝である。最大幅80cm、深さ約5cmで南北方向にのびる。東側にあるSD7と約1.5m離れて平行する。須恵器、土師器が出土しており、SD7同様中世と思われる。

SD37 1a~1b区に位置する溝状の遺構である。幅は様ではなく約0.4~1.5m前後、深さ約



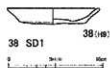
K区 平面図

50 cmを有する。遺物は土師器 31 や古銭が出土しており、室町時代と考えられる。

S X 48 8 b ~ 9 b 区に位置する第 1 遺構面で確認した浅い溝状の遺構である。完形に近い須恵器 32、土師器 33 等が出土しており、中世と考えられる。

[ K区 ] (258.8 m<sup>2</sup>)

D区とG区の間位置する調査区である。溝や土坑等が検出され、SD 1からは中世前半頃の土師器小皿 38 が出土している。



K区 出土遺物

## 2. まとめ

人為的な遺構はそれ程多くないが、中世の掘立柱建物や奈良時代の旧河道、弥生時代の溝等が検出された。包含層から古代の瓦片がいくつか出土しているが、瓦葺の建物等は検出されていない。

(山崎・坂口)

6. 入田稲荷前遺跡・姥畑遺跡・喜平前遺跡・南畑遺跡 - 1次調査 - 荒目遺跡 - 2次調査 - 森ノ腰遺跡 - 1次調査 -

所在地 八木入田・養宜中・養宜上  
事業名 経営体育成基盤整備事業（養宜地区）  
担当者 的崎薫・定松佳重  
種別 確認調査  
調査期間 平成29年6月15日～12月15日  
調査面積 601㎡（2×2m149ヶ+1×5m1ヶ）



調査の位置

1. 調査内容

調査対象地は淡路島最大の平野である三原平野北東部の標高20～47mを測る成相川右岸～養宜川の両岸に位置する田圃地帯で、調査地の北端で養宜川が成相川に合流している。調査地やその周辺には入田山古墳群や上八木古墳・養宜館跡（県指定史跡）・南畑遺跡・戒壇寺跡・入田稲荷前遺跡・城の山城跡など多くの遺跡が包蔵されている。

平成25年度に上記事業に伴って分布調査を行った結果、広範囲に遺物の散布が認められた。よって、地下の埋蔵文化財の有無を確認するため、遺跡範囲確認調査を行った。当地区は農業が盛んな地域であることから、一年の大半の期間を農作物の栽培で使用している田圃も多く、2年計画で地元との調整を取りつつ調査を進めることとなった。

2×2mの調査区を149ヶ所、1×5mの調査区を1ヶ所設定した。調査順に主な調査区のみ記述する。なお、調査対象地が広範囲であるため、調査区No.の後に（ ）でどの遺跡に位置するかを示すこととする。（A）入田稲荷前遺跡、（B）姥畑遺跡、（C）喜平前遺跡、（D）南畑遺跡、（E）荒目遺跡、（F）森ノ腰遺跡

No.2（F）23層上面に掘り込まれる溝を確認した。断面観察から9～13層・14～22層で大きく2度の埋没が確認できる。14～22層には弥生時代中期後葉の土器が含まれるが、9～13層からは遺物を確認できなかった。周辺の調査区であるNo.1・3は耕作上のほぼ直下が地山であり、遺構を確認できなかったことから、詳細な遺跡範囲を確定するためNo.103・104を追加したが遺構は見つからなかった。

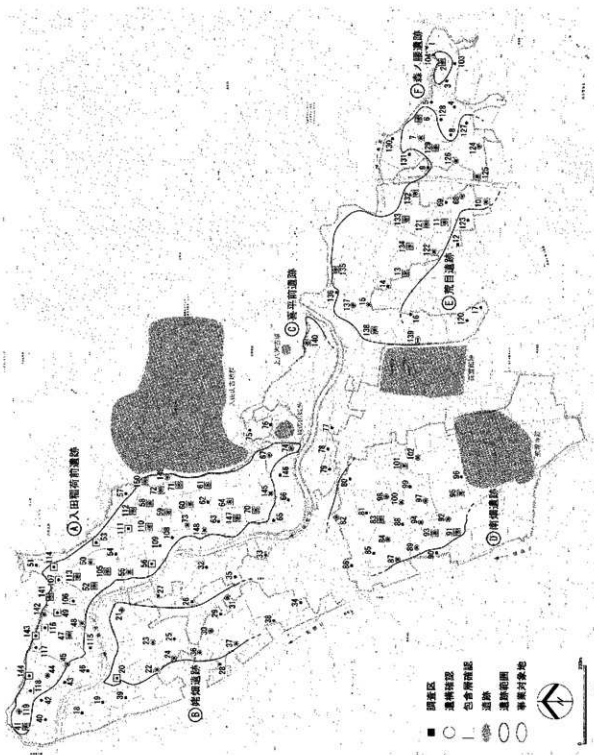
No.6（E）暗灰黄色粘結細砂質土に掘り込まれる遺構を3基検出した。遺構には切り合いがみられたが、遺物が乏しく時代は明確ではない。また、断面観察でこの遺構面より下層の黒褐色粘質土で遺構を確認した。2面とも遺構面に8～9世紀の遺物が多く含まれる。

No.7（E）地山に掘り込まれる幅約40cmの浅い溝を確認し、弥生時代中期末頃の土器やサヌカイト片が出土した。

No.10（E）2基の遺構を検出した。1基は深さ40cmの柱穴である。遺構から時代を判別できる遺物は出土していないが、遺構面やその上層には古代の遺物が含まれる。

No.11（E）小穴を1基検出した。遺構から時代を判別できる遺物は出土していないが、遺構面上層には古代の遺物が含まれる。

No.13（E）弥生時代～中世の遺物を多く含む包含層が堆積する。地山である褐色粘砂質土で土坑や柱



調査区設定図

穴などの遺構を検出したが、断面観察で上層より掘り込まれる遺構があることがわかった。遺構から時代を判別できる遺物は出土していない。

No 15 (E) 礫を多く含む地山に掘り込まれる柱穴を2基検出した。2基とも20 cmほどの深さで、古代の遺物に混じって弥生時代終末期の東阿波型土器が出土した。

No 21 (B) 6層上面で遺構を確認した。柱穴(遺構1)からは中世の土師質鍋が出土している。6層より下において遺構は確認できなかったが、遺物を含む堅く安定した堆積層であったため、周辺に遺構が存在する可能性がある。

No 22 (B) 10層上面から掘り込まれる遺構4の上に深さ10 cmほどの小穴3基(遺構1～3)が掘り込まれている。遺構4は底面が平らであり、流水の痕跡がみられないため、溝ではなく大きな土坑と考えられる。弥生時代後期の遺物が出土している。また、6層から出土した土器の中には弥生時代後期前半の他地域からの搬入品が含まれていた。

No 23 (B) 礫層の地山に掘り込まれた遺構を断面観察も含めて5基確認した。時代は不明である。

No 24 (B) 柱穴を1基検出したが、遺構から遺物は出土していない。遺構面には古代の遺物が含まれる。また、断面観察で下層にもう1面遺構面を確認したが、時代は不明である。

No 30 (B) 断面観察より黒褐色シルト質土で遺構を確認した。遺構面やその上の包含層からは弥生時代後期の土器が出土している。

No 31 (B) 断面観察より2面の遺構面を確認した。上層の遺構面では三足鍋の脚が出土していることから、中世と考えられる。下層の遺構面の時代は不明である。

No 36 (B) 上層に位置する褐色極細砂質土に掘り込まれる遺構を断面で確認した。遺構面より下層で中世の瓦器や土師器皿が出土したことから、遺構の時代は中世以降である。下層は砂～礫の堆積層であることから、この辺りまで成相川の影響が及んでいたものと考えられる。

No 37 (B) にぶい黄褐色粘細砂質土に掘り込まれる小穴を壁際確認した。時代は不明である。

No 41 (A) 水捌けが悪く湧水が激しい場所に位置するが、遺構面を2面確認した。第1遺構面では奈良時代～平安時代前半頃の柱穴1基を検出した。第2遺構面では古代の小穴と溝もしくは土坑の一部を検出した。

No 44 (A) 調査区全体が流路の中にあたり、一度埋没後、別の新しい流路によって切られている。新しい流路からは古代の須恵器や土師器が出土しているが、先行する流路からは遺物を確認できなかった。

No 45 (A) この調査区も下層が流路にあたり、一度埋没後、別の流路によって切られている。先行する流路の礫層から弥生時代後期中葉～後葉にかけての土器がややまとまって出土した。

No 47 (A) 古代の遺構と考えられる小穴2基を黒褐色粘質土で検出した。

No 48 (A) 直径1.1 m、深さ20 cmの土坑や柱穴などを確認した。遺構からは土師器・須恵器・瓦器など鎌倉時代の遺物が出土している。

No 49 (A) 遺構は確認できなかったが、土師器・須恵器・製塩土器など古代の遺物を多く含む包含層を確認した。周辺から遺構が確認される可能性が高い。

No 50 (A) 黒色粘質土で幅約30 cmの古代の浅い溝の上に切り合う深さ25 cmの柱穴を検出した。柱穴の底には拳大の根石が3個置かれていたが、時代は不明である。

No 52 (A) 遺構面を2面確認した。第1遺構面では中世の柱穴や小穴など7基の遺構を検出した。遺

構面となる黒褐色シルト質土から弥生時代終末期の東阿波型土器甕が出土した。第2遺構面では柱穴と幅約60cmの浅い溝を検出したが、遺物は出土していない。

№33 (A) 包含層に土師器・須恵器・製塩土器など古代の遺物が多く含まれる。遺構は確認していない。

№55 (A) 古代の遺構を断面観察で確認した。

№56 (A) 包含層に土師器・須恵器・製塩土器など古代の遺物を多く含むが、遺構は確認していない。

№58 (A) 遺構面を2面確認した。遺構からの遺物は少ないが、第1遺構面は古代～中世、第2遺構面は古代の遺構と考えられる。

№59 (A) 弥生時代中期後葉の遺物を含む包含層を確認した。また、断面観察で2基の遺構を確認した。

№60 (A) 13層上面と16層上面で遺構を確認した。第1遺構面には多くの遺構が存在し、平面で検出できなかった遺構もある。直径約1.0m、深さ38cmの土坑(遺構3)からは大量の焼土とともに鎌倉時代の土師器・須恵器・瓦器・輸入陶磁器(白磁)などが出土した。第2遺構面では小土坑(遺構7)を確認したが、遺物は出土していない。13・14層には四国からの搬入品を含む弥生時代中期後葉の遺物が多く含まれることから同時代と推測される。

№61 (A) 褐灰色土に掘り込まれる遺構を5基検出した。遺構から出土した遺物が少ないため時代は判別できないが、遺構面直上の包含層には鎌倉時代の遺物が含まれていた。

№64 (A) 20層上面と21・22層上面で遺構を確認した。第1遺構面では奈良時代の土坑(遺構1・4)と柱穴(遺構2・3)を検出した。遺構1は直径60～70cmで、須恵器・土師器(畿内産土師器を含む)・製塩土器などが出土した。遺構2・3は直径60cm以上の大型の柱穴で、深さは遺構2が60cm、遺構3が72cmを測る。第2遺構面では小穴を3基検出した。遺構の遺物は小片であるため時代は明確ではないが、遺構直上の20層には瀬戸内地域からの搬入品を含む弥生時代中期後葉の遺物が含まれていた。また、5・6層には奈良時代の遺物が多く含まれ、断面観察で9層上面から掘り込まれる遺構(7・8層)も確認し、7層からは青銅製帯金具の蛇尾片が出土した。その当時、役人などがベルトに着けていた帯金具には細かい規定があり、衣服令が六位以下の者は青銅製と決められていた。淡路国の役人において、最高位の国司は六位にあたり、国司以下の役人の存在を示唆する遺物である。この調査区は遺構・遺物の両面において官衙的要素が高い。

№67 (A) 浅い土坑を検出した。鎌倉時代以降の遺構である。

№68 (E) 北西から南東方向に走る幅1m以上、深さ60cmの溝状の遺構などを暗褐色粘質土で検出した。遺物は小片のため時代は不明である。

№70 (A) 遺構は全て同一面に掘り込まれた遺構であったが、検出が困難であったため、褐灰色砂質土の遺構を掘削後、全体に少し下げて再度遺構検出をし、第2遺構面とした。第1遺構面では古代以降の柱穴や土坑を5基検出した。第2遺構面の遺構6は弥生時代中期後葉と終末期の遺物を多く含む遺構である。部分的な検出であったため、遺構の性格はわからないが終末期の土器の中には東阿波型土器や阿波系の甕が含まれていた。遺構7は東に落ちていく遺構で、弥生時代後期末～終末期の遺物が出土した。

№71 (A) 2面の遺構面で柱穴などの遺構を検出した。第1遺構面は古代、第2遺構面は弥生時代の可能性が考えられる。

№72 (A) 黒褐色粘質土に掘り込まれる弥生時代終末期の竪穴住居を検出した。竪穴住居は円形を呈し、周溝がめぐっている。

No. 73 (A) 地山に掘り込まれる遺構を3基検出した。遺構から鎌倉時代の遺物が出土している。また、断面観察で上層に別の遺構面を確認したが、時代は不明である。

No. 74 (A) 耕作土直下で土坑の一部と考えられる遺構を検出した。遺構から縄文時代前期前葉と中期末の土器が出土している。前期前葉の縄文土器は搬入品で、生駒西麓産（河内地方）の北白川下層式、中期末の土器は北白川C式と思われる。

No. 82 (D) 上層は後世の擾乱を受けていたが、地山であるにふい黄褐色細砂質土で遺構を2基確認した。時代は不明である。

No. 83 (D) 遺構面を2面調査した。第1遺構面では、5層上面で古代の柱穴や土坑を検出した。第2遺構面では、10層上面に掘り込まれる遺構を検出した。遺構4は直径40cm、深さ60cmの柱穴である。遺構5は南側に落ちていく遺構の一部であり、古代の遺物を含む。また、断面観察で8層上面から掘り込まれる遺構（6・7層）を確認したことから、遺構面は3面となった。5～8層には奈良時代前半の遺物が多く含まれていた。

No. 84 (D) 地山に掘り込まれる遺構を2基検出し、浅い土坑状の遺構からは弥生時代後期の土器が出土している。

No. 87 (D) 断面観察で、調査区の大部分が北に向かって落ちていく遺構であることを確認した。遺構から須恵期の長頸壺など古代の遺物が出土している。

No. 89 (D) 調査区全体が大きな遺構の中にあると考えられ、上層（1～5層）は擾乱で後世の影響を受けているものの、中層（6層）は弥生時代終末期～古墳時代初頭、下層（7～9層）は弥生時代後期の遺物を大量に含む。中層からは製塩土器（脚台Ⅲ式）や東阿波型土器の他、淡路島では出上の少ない在地産の布留1式甕、下層からは長さ1.9cmの碧玉製管玉が出土している。

No. 91 (D) 遺構面を2面確認した。第1遺構面では耕作土直下に掘り込まれる室町時代頃の浅い溝状の遺構を検出した。第2遺構面では異なる時期の遺構を同一面で確認し、弥生時代の遺構の上に平安時代の遺構が切り込んでいた。

No. 92 (D) 鎌倉時代の遺構を4基検出した。

No. 93 (D) 弥生時代後期と考えられる遺構を断面観察で確認した。

No. 94 (D) 4・5層上面で5基の遺構を検出した。埋土の色が異なり、遺構3からは中世、遺構4・5からは古代の遺物が出土している。遺構5の遺物の中には、小片ではあるが一般の集落では出土しない平安時代前葉の近江系緑釉陶器片を確認した。遺構1・2は遺物が小片であるため時代の判別が難しいが、黒褐色の埋土であることから、弥生時代の可能性が考えられる。

No. 95 (D) 遺構面を3面確認した。第1遺構面では平安時代の遺物を含む浅い土坑など3基の遺構を検出したが、その内1基は検出面より上層から掘り込まれる遺構であることが断面観察でわかった。第2遺構面では古代の遺物と弥生時代後期の2時期の遺構を確認した。

No. 97 (D) 耕作土直下で古代の遺構を7基検出した。この内2基は床面が平らな土坑の上に切り込んでいた。

No. 98 (D) 遺構面を2面確認した。第1遺構面では古代の遺構と考えられる浅い溝状の遺構と土坑を検出した。第2遺構面では小穴2基を検出したが、小片の遺物しか出土していないため、時代は不明である。

No. 100 (D) 耕作土直下で直径約70cm、深さ40cmの大型柱穴を確認した。遺物は小片であるため、時



代は不明である。

No 101 (D) 第1遺構面では平安時代の柱穴を1基、地山である第2遺構面では時代不明の土坑を検出した。

No 102 (D) 地山に掘り込まれる柱穴を確認した。時代は不明である。

No 105 (A) 地山に掘り込まれる柱穴を確認した。直径は小さいが深さは35 cm以上を測る。時代は不明である。

No 110 (A) 遺構面を2面確認した。第1遺構面では時代不明の遺構を2基確認した。第1遺構面より下層の包含層には弥生時代後期～終末期の遺物が多く含まれ、第2遺構面の小穴からも同時期の遺物が出土した。

No 112 (A) 段丘面の崖下に位置する。上層には古代の瓦が散見し、その下にある不安定な砂層に土坑や柱穴などの遺構が6基掘り込まれていた。遺構には切り合いがみられ、土坑には弥生時代終末期の遺物が多く含まれていた。そのほかの遺構については、遺物が少なく時代は明確ではない。

No 113 (A) 遺構面を2面確認した。遺構から遺物は出土していないが、第1遺構面は中世と考えられる。

No 116 (A) 奈良～平安時代の遺物を多く含む包含層を確認した。中でも製塩土器の割合が多い。南西方向に傾斜する落ちを地山で確認したが、遺物は含まれず、遺構かどうか判断は難しい。

No 119 (A) 水捌けの悪い場所であるが、古代の遺構面を2面確認した。周辺に位置する調査区No. 117・118では遺構を確認できなかったが、包含層には古代の遺物が多く含まれていた。

No 121 (E) 黒褐色粘砂質土に掘り込まれる柱穴などの遺構を3基検出した。遺構の時代は明確ではないが、古代より遡らない。

No 122 (E) 8層上面で土坑や溝状の遺構4を検出した。遺構には切り合いがみられる。遺構4は弥生時代の遺構の可能性はあるが、その他の遺構は中世である。

No 124 (E) 谷筋に位置する調査区で、溝の肩部と推測される古代の遺構を確認した。

No 125 (E) 礫層である6層上面から掘り込まれる土坑などの遺構を確認した。遺構1は弧状を呈する底が平らな遺構で、弥生土器が出土していることから円形の竪穴住居の可能性はある。

No 126 (E) 谷筋に位置する調査区である。下層は養宜川の旧河道にあたり、弥生時代中期後葉～後期前半の土器が多く含まれていた。河川の埋没後、弥生時代後期末の遺物を含んだ層が堆積したものとと思われる。

No 129 (E) No 126 同様に谷筋に位置する調査区で、7・8層には奈良時代の遺物が含まれている。12層より下の旧河道には弥生時代中期後葉の遺物が多く含まれ、特に23～25層に多い。また、22層からは生駒西麓産地域特有のチョコレート色をした胎土の土器が出土している。

No 132 (E) 地山である礫混灰黄色シルトで柱穴などの遺構を5基確認した。遺構には切り合いが見られるが、あまり時期差は無いものと考えられる。遺構から時代が判別できる遺物は出土していないが、中世の可能性はある。

No 133 (E) 弥生時代中期後葉の遺物を多く含む礫混黒色粘質土に掘り込まれる遺構を断面観察で確認した。遺構埋土には礫が多く含まれ、弥生時代終末期頃と思われる遺物が出土している。

No 134 (E) 上層は中世、中層は古代の遺物を多く含む包含層が堆積する。下層は大きな溝状の遺構である可能性があり、四国地域からの搬入品を含む弥生時代中期後葉～終末期の遺物が多く出土した。

No.135 (E) 8層上面で、遺構を確認した。遺構2は養宜川に向かって流れる溝の肩部と考えられ、奈良～鎌倉時代の遺物が出土している。

No.137 (E) 地山である礫混黒褐色粘細砂質土で大きな土坑を確認した。遺物は小片のため時代は不明である。

No.138 (E) 灰黄褐色細砂質土に掘り込まれる土坑や多くの小穴などを確認した。土坑は1.2m以上、深さは30cmあり、弥生時代後期～終末期の遺物が出土している。遺構の埋土は2種類あることから、異なる時代の遺構が存在するが、土坑以外の遺物は小片なため時代は明確でない。

No.139 (E) 養宜館の東に位置する調査区である。養宜館に関連する土塁の外堀などの遺構が検出されることを想定して、道路際から1×5mのトレンチ調査を行った。断面観察から、14層上面から掘り込まれる3～12層の溝状遺構と土坑と考えられる13層を確認した。7層からは輸入陶磁器（青磁）、13層からは瀬戸焼や備前焼が出土し、室町時代頃と考えられる。養宜館と直接関係する遺構であるかは不明であるが、時代的には同時期と思われる。

No.140 (C) 良好な立地条件とは言えない狭い段丘面に位置する場所であったが、12層上面と15層上面で遺構を確認した。両面とも遺構の密度が高く、第1遺構面では古代の柱穴など、第2遺構面では弥生後期～古代の範疇の土坑などを検出した。

No.141 (A) 段丘面崖下に位置する調査区である。11層上面で土坑や溝状の遺構を確認した。浅い溝状の遺構2からは鎌倉時代の遺物が出土している。また、古代や中世の遺物を含む9層から3枚の古銭が重なった状態で出土した。古銭はすべて中国新の王莽が紀元14～40年（初鋳14もしくは20年）の間に鋳造した貨泉である。貨泉は中世の大量備蓄銭の中から発見されることもあるが、その割合は1万枚に1枚程度である。貨銭のみが複数枚見つかった今回の事例は弥生時代後期後半～終末期に流入したものと考えるのが妥当であるが、この調査区から該当する時期の遺構は確認できなかった。周辺の調査区では、No.45・52・72・110～112で弥生時代の遺構が見つまっていることから、河川の氾濫などによって流れ込んだものと推測する。

No.142 (A) 断面観察で遺構を確認した。時代は不明である。

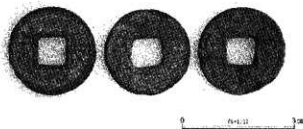
No.145 (A) 遺構面を2面確認した。第1遺構面では古代の小穴など、第2遺構面では弥生時代後期の土坑などを検出した。

No.147 (A) 7層上面と9層上面で遺構を確認した。第1遺構面では平安時代の柱穴や土坑を確認した。第2遺構面では弥生時代中期前葉の円形竪穴住居（遺構6）などを確認した。復元すると直径約3.2mとなるが、主柱穴は調査区の中では確認できなかった。

No.148 (A) 浅い土坑や柱穴などの遺構を確認した。その内1基は縄文時代後期の北白川上層式併行期の遺物を含む遺構であったが、その他は古代の遺構である。

No.149 (A) 段丘面崖下の湿地に設定した調査区で、遺構を2基確認した。時代は不明である。

No.150 (A) No.149と同じく、段丘面崖下の調査区で、調査区全体が大きな溝の中に位置する。上層



No.141 出土貨泉

No.142 (A) 断面観察で遺構を確認した。時代は不明である。

No.145 (A) 遺構面を2面確認した。第1遺構面では古代の小穴など、第2遺構面では弥生時代後期の土坑などを検出した。

No.147 (A) 7層上面と9層上面で遺構を確認した。第1遺構面では平安時代の柱穴や土坑を確認した。第2遺構面では弥生時代中期前葉の円形竪穴住居（遺構6）などを確認した。復元すると直径約3.2mとなるが、主柱穴は調査区の中では確認できなかった。

No.148 (A) 浅い土坑や柱穴などの遺構を確認した。その内1基は縄文時代後期の北白川上層式併行期の遺物を含む遺構であったが、その他は古代の遺構である。

No.149 (A) 段丘面崖下の湿地に設定した調査区で、遺構を2基確認した。時代は不明である。

No.150 (A) No.149と同じく、段丘面崖下の調査区で、調査区全体が大きな溝の中に位置する。上層

には奈良時代以降の遺物も含まれているが、中層以下は弥生時代後期末～終末期の遺物のみが出土する。溝の中には切り合いがみられ、特に新しい溝の中に遺物が多く含まれていた。同様の立地にあるNo. 112・149は、地山まで掘削できていなかったと考えられ、掘削深度を深めれば大きな溝状遺構を確認できた可能性が高い。

## 2. まとめ

調査の結果、広範囲において埋蔵文化財の包蔵が確認され、周知の遺跡である入田稻荷前遺跡・南畑遺跡・荒目遺跡は包蔵地の範囲が拡大し、姥畑遺跡・喜平前遺跡・森ノ腰遺跡については新たに発見された遺跡となった。遺跡ごとにまとめる。

### (A) 入田稻荷前遺跡

養宜川の右岸、狭い段丘面に広がる遺跡である。縄文時代前期～鎌倉時代の遺構が見つかり、中心となる時代は弥生時代中期～終末期と奈良～平安時代初頭である。現段階ではNo. 74から出土した縄文時代前期前葉の遺物がこの遺跡の中での初現となる。養宜川の対岸には縄文時代の石器やサヌカイトが散布する南畑遺跡が広がり、関連するものと考えられる。縄文時代中期と後期の遺構・遺物も僅かではあるが確認した。弥生時代中期以降は遺跡の南部を中心に弥生時代の遺構を確認した。No. 147では中期前葉、No. 72では終末期の竪穴住居も検出し、定住が認められる。また、No. 141で出土した貨幣は弥生時代の遺構からではないものの、当時の貴重品であることは間違いなく、この地域だけでなく淡路島の弥生社会を考える上で重要な遺物と言える。古墳時代の遺構・遺物は見つかっていない。奈良～平安時代初頭の遺構は全域に点在するが、遺跡の北部では古代より前の遺構は確認できなかったため、この頃に拓けたものと思われる。この時代の注目すべき調査区はNo. 64で、帯金具や織内産土師器など官衛的な要素が非常に強い遺物が出土し、官衛の可能性が考えられる。No. 112で古代の瓦が数点見つかることも周辺に役所跡や寺院の存在を示唆するものである。また、内陸部にありながら製塩土器が多く出土していることから、消費するだけの需要があったことがうかがえる。平安時代後半には一旦衰退をみせるが、鎌倉時代になると遺跡の規模は縮小しながらも、中央付近に広がりを見せる。室町時代の明確な遺構は、今回確認できなかった。今年度で大部分の調査が終わり、次年度に追加調査を数ヶ所行う予定である。

### (B) 姥畑遺跡

成相川に養宜川が合流する地点の間に位置する弥生時代後期～中世の遺跡である。遺物の包蔵量は他の遺跡に比べるとやや少なく、遺跡の中心となる時代は中世である。次年度に行う残りの確認調査で詳細な遺跡範囲を確定したい。

### (C) 喜平前遺跡

養宜川右岸の狭い段丘上に位置し、新たに見つかった遺跡である。今年度の調査ではNo. 140の1ヶ所しか調査できていないため、詳細は不明である。周辺には養宜館に関連するような小字が点在するが、今回はそれより古い弥生時代～古代の遺構であった。次年度では周辺で中世の遺構も確認される可能性がある。

### (D) 南畑遺跡

縄文時代の石器の散布地として古くより周囲されている南畑遺跡は、成相川と養宜川の間に位置する。今回の調査では、No. 80～82周辺の地表面で縄文時代前期の石器や土器を採集したものの、縄文時

代の遺構は全く確認できなかったが、弥生時代後期～室町時代の遺構・遺物が広範囲に広がり、他ではあまりみられなかった平安時代の遺構も見つかっている。弥生時代においてはNo. 89 で碧玉製管玉や東阿波型土器が出土し、他地域との交流がうかがえる。平安時代にはNo. 94 で小片ながらも緑釉陶器が出土している。市内で現在までに緑釉陶器が出土した遺跡は官衙や寺院が多く、南畑遺跡の南側に所在する奈良～平安時代の戒壇寺跡に関連する遺物の可能性がある。次年度の確認調査結果によって、今回南畑遺跡とした範囲は戒壇寺跡の範囲に含まれているかもしれない。

#### (E) 荒目遺跡

昨年度の確認調査によって見つかった養宜川左岸に位置する弥生時代中期後葉～室町時代の遺跡である。弥生時代中期後葉～終末期・奈良～平安時代初頭を中心とし、遺跡全域に広がる。遺跡の中で養宜川の旧河道 (No. 9・124・126・129・131) を確認した。No. 126・129 には弥生時代中期後葉の遺物が多く出土し、No. 126 から出土した河内地方の土器から、他地域との交流がうかがえる。弥生時代終末期の遺構は遺跡の西平で確認されている。今回の調査で鎌倉時代の明確な遺構を確認できていないが、遺物は包蔵されていることから今後周辺で確認される可能性がある。室町時代の遺構はNo. 139 でのみ確認している。次年度の調査によって、別の遺跡として考えるべきかもしれない。遺跡全体としては、今回の調査範囲より南東に広がる可能性が高い。

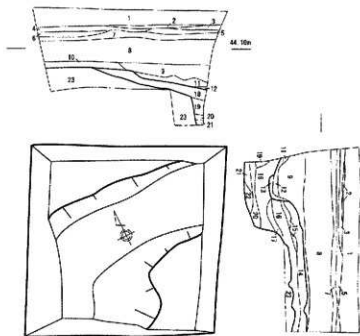
#### (F) 森ノ腰遺跡

調査対象地の中で西端に位置し、養宜川右岸の狭小な遺跡である。No. 2 で養宜川へと流れる人為的な弥生時代中期後葉の溝を検出したが、周辺の調査区で遺構は確認できなかった。

以上のことから、養宜地区は市内でも早い段階にあたる縄文時代前期から人々の生活の痕跡がみられる地域である。弥生時代中期～終末には他地域との交流も盛んであり、拠点的な集落だったと考えられるが、古墳時代初頭には完全に衰退する。古墳時代後期になって周辺には人田山古墳群や上八木古墳などが築かれはじめるが、定住の痕跡はみられない。その後、律令期に入って、古代の官道が整備されると、南海道のすぐ北側に位置する調査地は再び繁栄をみせる。古代の行政区で三原郡養宜郷に属する調査地は三原平野の東の入口となり、重要な場所であったと推測される。平安時代後半には一旦衰退をみせるが、鎌倉時代にはまた集落が営まれていたようである。室町時代には淡路国守護の居館とされる養宜館が築かれ、淡路の中心地となるが、今回の調査でこの時期の遺構はほとんど見つからない。次年度には調査対象地南西部に位置する戒壇寺跡を中心に今年度調査不可能であった田岡や補足調査を行って遺跡範囲を絞り込む予定であるが、どの遺跡も遺構密度が高く、出土遺物から考えても非常に歴史の価値のある重要な遺跡となるであろう。

(的確)

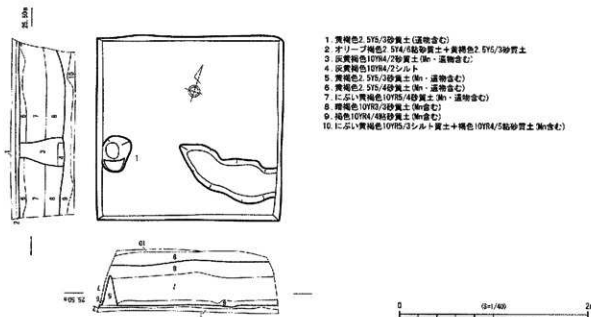
No. 2



1. にぶい黄褐色10YR4/3土+  
23層ブロック多く含む(遺物含む、腐土)
2. 腐層作土
3. 褐色10YR4/5土
4. にぶい黄褐色10YR4/3土
5. にぶい黄褐色10YR5/3土(腐・遺物含む)
6. 暗褐色10YR3/3土
7. 灰黄褐色10YR4/2シルト質土(腐・遺物含む)
8. 灰黄褐色10YR5/2砂質土(腐・遺物含む)
9. 暗褐色10YR2/2シルト質土+23層大ブロック+  
灰黄褐色10YR5/2シルト質土
10. 灰黄褐色10YR5/2細砂

11. にぶい黄褐色10YR5/3シルト質細砂
12. 暗灰色2.5Y5/2細砂
13. 褐色10YR4/1シルト質細砂+23層ブロックまばらに含む
14. 灰黄褐色10YR5/2シルト質細砂
15. 黄灰色2.5Y5/1細砂
16. 暗灰色10YR5/1細砂(遺物含む)
17. 暗灰色2.5Y4/2シルト質細砂(遺物含む)
18. 褐色10YR4/1シルト質細砂
19. 灰黄褐色10YR5/2シルト質細砂
20. 暗灰色10YR5/1細砂(腐・遺物含む)
21. 暗褐色10YR2/1砂(遺物含む)
22. 灰黄褐色10YR4/2細砂(遺物含む)
23. 黄褐色10YR5/6粘質土+灰黄色2.5Y7/2粘質土

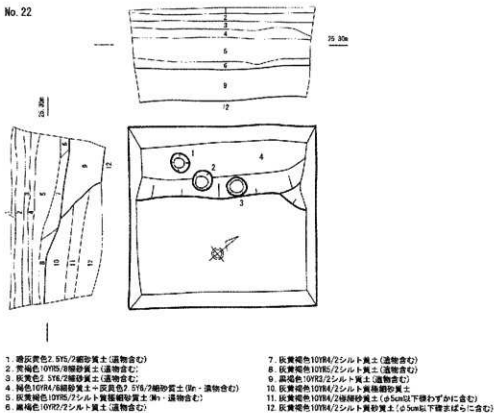
No. 21



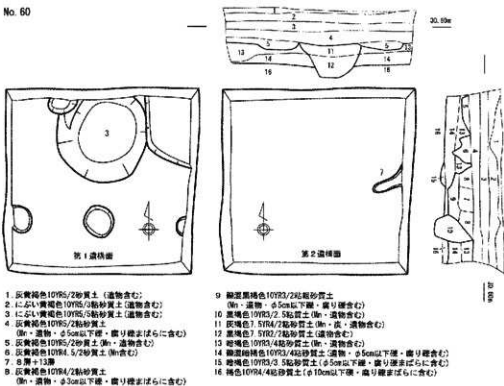
1. 黄褐色2.5Y5/3砂質土(腐物含む)
2. オリーブ褐色2.5Y4/6粘砂質土+黄褐色2.5Y5/3砂質土
3. 灰黄褐色10YR4/2砂質土(腐・遺物含む)
4. 灰黄褐色10YR4/2シルト
5. 黄褐色2.5Y5/2砂質土(腐・遺物含む)
6. 黄褐色2.5Y5/4砂質土(腐・遺物含む)
7. にぶい黄褐色10YR5/4砂質土(腐・遺物含む)
8. 暗褐色10YR3/2砂質土(腐物含む)
9. 褐色10YR4/4粘砂質土(腐物含む)
10. にぶい黄褐色10YR5/3シルト質土+褐色10YR4/5粘砂質土(腐物含む)

調査区断面図・平面図 1

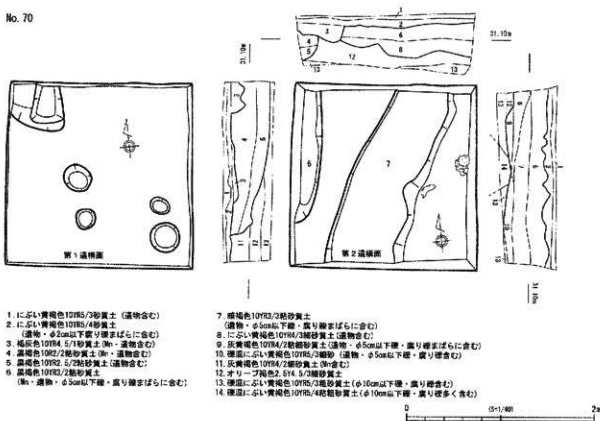
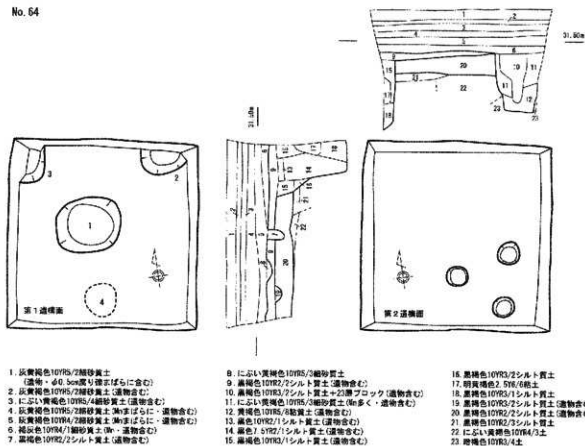
No. 22



No. 60

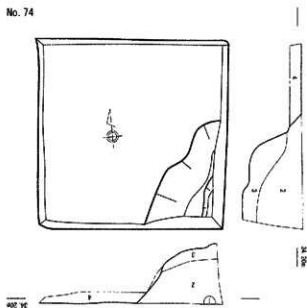


調査区断面図・平面図 2



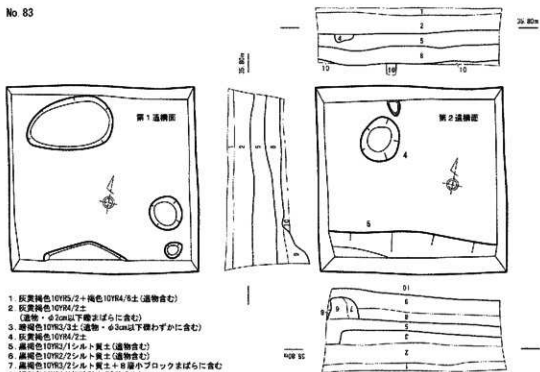
調査区断面図・平面図 3

No. 74



1. 褐色7.5YR4/3砂質土
2. 黒褐色7.5YR3/2粘砂質土(遺物・φ10cm以下層・覆り層まばらに含む)
3. 黒褐色7.5YR3/2粘砂質土(遺物・φ30cm以下層・覆り層まばらに含む)
4. 緑褐色7.5YR3/3粘砂質土(φ10cm以下層・覆り層含む)

No. 83

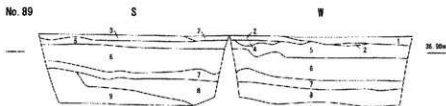


1. 灰黄褐色10YR5/2+褐色10YR4/5土(遺物含む)
2. 灰黄褐色10YR4/7土  
(遺物・φ20cm以下層まばらに含む)
3. 緑褐色10YR3/3土(遺物・φ30cm以下層わずかに含む)
4. 灰黄褐色10YR4/2土
5. 黒褐色10YR2/1シルト質土(遺物含む)
6. 黒褐色10YR2/2シルト質土(遺物含む)
7. 黒褐色10YR3/2シルト質土+6層のブロックまばらに含む
8. 褐灰色10YR4/1粘砂質土(遺物含む)
9. 黒褐色10YR2/2粘砂質土+10層ブロックまばらに含む(遺物含む)
10. 黒褐色10YR3/2土

調査区断面図・平面図 4

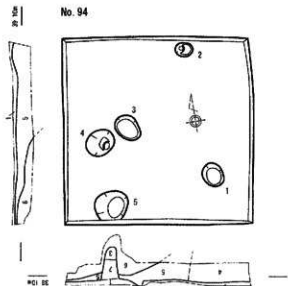


No. 89



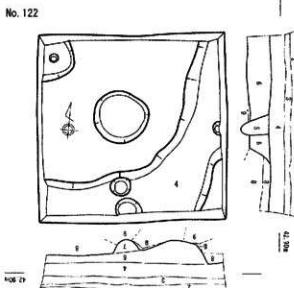
- 1 黒褐色10YR2/2土 (遺物含む)
- 2 にぶい黄色2.5Y6/2砂質土 (遺物含む)
- 3 にぶい黄褐色10YR5/3土 (遺物含む)
- 4 灰黄褐色10YR5/2土
- 5 灰黄褐色10YR4/2土 (遺物含む)
- 6 黒褐色10YR2/2土 (遺物含む)
- 7 黒褐色2.5Y3/2土 (遺物含む)
- 8 にぶい黄褐色10YR4/3土 (遺物含む)・φ20cm以下跡まばらに含む
- 9 にぶい黄褐色10YR4/3土 (遺物含む)

No. 94



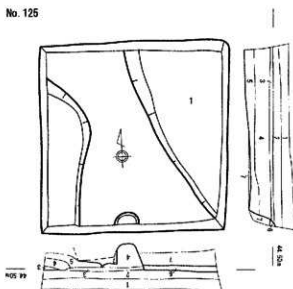
- 1 にぶい黄褐色10YR4/3砂質土 (Fe沈着、遺物含む)
- 2 にぶい黄褐色10YR4/3粘砂質土 (遺物・φ5cm以下跡・痕り跡まばらに含む)
- 3 黒褐色10YR2.5/2粘砂質土 (遺物・φ5cm以下跡・痕り跡まばらに含む)
- 4 にぶい黄褐色10YR5/4砂質土 (遺物・φ10cm以下跡・痕り跡まばらに含む)
- 5 黒褐色10YR3.5/2粘砂質土+にぶい黄褐色10YR5/4砂質土 (遺物・φ5cm以下跡・痕り跡まばらに含む)
- 6 雑色にぶい黄褐色10YR4.5/2砂質土 (φ10cm以下跡・痕り跡含む)

No. 122



- 1 雑作土
- 2 暗褐色10YR2/3粘質土 (Fe沈着、遺物・φ30cm以下跡・痕り跡まばらに含む)
- 3 黒褐色10YR2/2粘質土 (遺物・φ30cm以下跡・痕り跡まばらに含む)
- 4 黒褐色10YR3.5/2粘砂質土 (Fe・遺物・φ50cm以下跡・痕り跡まばらに含む)
- 5 6層+9層のブロック
- 6 灰黄褐色10YR4/2シルト質土 (遺物含む)
- 7 黒褐色10YR2.5/2シルト質土+9層ブロック
- 8 にぶい黄褐色10YR4/3シルト質土
- 9 褐色10YR4.4粘砂質土

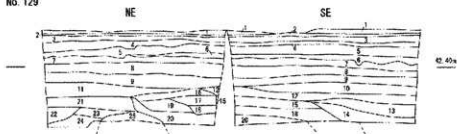
No. 125



- 1 灰黄褐色10YR4/2粘質土 (Fe・遺物・φ30cm以下痕り跡まばらに含む)
- 2 褐灰色10YR4/1.5粘土 (Fe・遺物含む)
- 3 褐色10YR4/4粘土 (φ30cm以下痕り跡まばらに含む)
- 4 黒褐色10YR4/2粘質土 (Fe・遺物含む)
- 5 灰黄褐色10YR4/2.5粘質粘砂 (遺物含む)
- 6 硬泥灰黄褐色10YR4/2粘土 (φ50cm以下痕り跡多く含む)
- 7 硬泥黒褐色10YR3/1粘土 (φ50cm以下跡・痕り跡多く含む)

調査区断面図・平面図 5

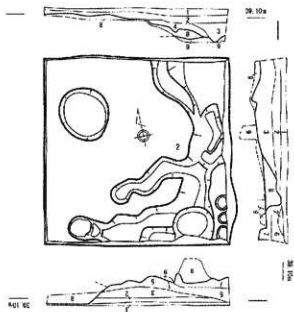
No. 129



1. 原状土
2. オリーブ褐色 2.5YR 5/2 粘質土
3. オリーブ褐色 2.5YR 4/2 粘質土 (遺物含む)
4. 灰黄褐色 10YR3.5/2 粘質土 (畝・遺物含む)
5. にぶい黄褐色 10YR5/2 粘質土 (畝・遺物・φ5cm以下張り継ぎばらを含む)
6. 黄褐色 2.5Y5/2 粘質土 (畝・遺物・φ3cm以下張り継ぎばらを含む)
7. 黄褐色 10YR2.5/2 粘質土 (畝・遺物・φ5cm以下張り継ぎばらを含む)
8. 暗褐色 10YR3/2 粘質土 (畝・遺物・φ5cm以下張り継ぎばらを含む)
9. 黄褐色 10YR2/2 粘質土 (遺物・φ5cm以下張り継ぎばらを含む)
10. 黄褐色 10YR2.5/2 粘質土 (Fe沈着・遺物含む)
11. 黄褐色 10YR3.5/2 粘質シルト (畝・遺物・遺物含む)
12. 黄褐色 2.5YR3/1 シルト質粘土 (Fe沈着・遺物含む)
13. 黄褐色 7.5YR1.7/1 ~ 黄褐色 7.5YR3/1 粘土
14. 暗褐色 10YR4/1 粘質シルト (畝・遺物含む)
15. 黄褐色 10YR3.5/2 シルト質粘土 (畝・遺物・φ3cm以下張り継ぎばらを含む)

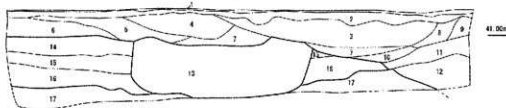
16. 暗褐色 10YR3/3 粘質土 (Fe沈着・遺物含む)
17. 黄褐色 10YR2.5/2 粘質砂 (畝・遺物含む)
18. 黄褐色 10YR3.5/1.5 粘質粉砂 (畝・遺物含む)
19. 暗褐色 10YR4/1.5 粘質細砂 (遺物・φ5cm以下張り継ぎばらを含む)
20. 黄褐色 10YR4/1.5 シルト質粘土 (畝・遺物含む)
21. にぶい黄褐色 10YR4/3 粘質土 (Fe沈着・畝・遺物含む)
22. 灰褐色 2.5YR2 粘質細砂 (Fe沈着・畝・遺物含む)
23. 灰褐色 10YR4/2 シルト質粘土 (畝・遺物・φ10cm以下張り継ぎばらを含む)
24. 灰褐色 10YR4.5/2 粘質粉砂 (畝・遺物含む)
25. 暗褐色 10YR4/1 シルト質粘土 (畝・遺物・φ10cm以下グライ化層多く含む)

No. 135

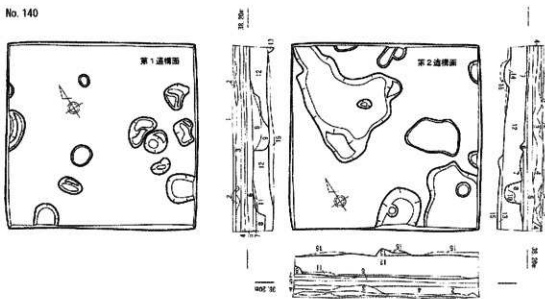


1. にぶい黄褐色 10YR4/3 粘質土 (遺物含む)
2. 暗褐色 10YR2/3 粘砂質土 + B層 (畝ブロックわずかに含む) (畝・遺物・φ5cm以下張り継ぎばらを含む)
3. 黄褐色 10YR3/2 粘砂質土 (畝・遺物含む)
4. 灰黄褐色 10YR4.5/2 粘砂質土 + B層 (畝含む)
5. B層 + B層 + にぶい黄褐色 10YR4/3 粘砂 (遺物含む)
6. B層 + 灰黄褐色 10YR4/2 粘砂質土 (畝・遺物含む)
7. 灰黄褐色 10YR4.5/2.5 シルト (畝・遺物含む)
8. にぶい黄褐色 10YR5/3 粘砂質土 (畝含む)
9. 明黄褐色 10YR6/5 粘質土 + にぶい黄褐色 10YR7/2 粘砂質土 (畝含む)

調査区断面図・平面図 6



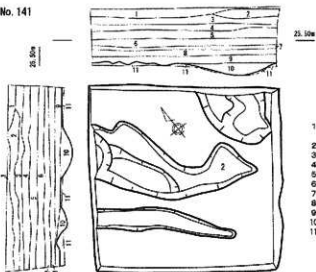
1. 耕作土
2. 黄褐色 10YR2/2 粘質土 + 褐色 10YR1.7/1 粘質土 (遺物・φ50cm 以下層・覆り様まばらに含む)
3. 濃赤褐色 10YR2/2 シルト (遺物・φ50cm 以下層多く含む)
4. 濃赤褐色 10YR1.7/1 粘質土 (遺物・φ100cm 以下層・覆り様多く含む)
5. 濃赤褐色 10YR4.5/2 粘質シルト (遺物・φ150cm 以下層・覆り様多く含む)
6. 濃赤褐色 7.5YR1.7/1 粘質土 (遺物・φ150cm 以下層・覆り様まばらに含む)
7. 高褐色 10YR2.5/2 粘質土 (遺物・φ50cm 以下層・覆り様まばらに含む)
8. 高褐色 10YR2/2 粘質シルト (遺物含む)
9. にぶい黄褐色 10YR6/4 - にぶい黄色 7.5YR/3 粘質土 (φ100cm 以下層・覆り様まばらに含む)
10. 7.5YR/3 層 + 9. 層
11. 濃赤褐色 10YR2/1.8 粘質土 (遺物・φ100cm 以下層・覆り様多く含む)
12. 濃赤褐色 10YR2/2 粘質土 (遺物・φ150cm 以下層・覆り様多く含む)
13. 濃赤褐色 10YR2/2 シルト質粘土 (遺物・φ150cm 以下層・覆り様多く含む)
14. 高褐色 7.5YR2.5/1 粘質シルト (遺物・φ100cm 以下層・覆り様まばらに含む)
15. 高褐色 7.5YR2/1 粘質シルト (遺物・30cm 以下層・覆り様まばらに含む)
16. 高褐色 7.5YR1.7/1 粘質シルト (遺物・φ100cm 以下層・覆り様まばらに含む)
17. 濃赤褐色 7.5YR1.7/1 シルト質粘土 (φ150cm 以下層・覆り様まばらに含む)



1. 暗灰褐色 7.5Y/2.5 粘質土
2. 黄褐色 10YR5/6 粘土 + にぶい黄褐色 10YR2/3 粘砂質土 + 1. 層
3. 黄褐色 2.5Y/3 シルト (遺物含む)
4. 黄褐色 2.5Y/4 シルト (遺物含む)
5. にぶい黄褐色 10YR5/3 粘質シルト (遺物含む)
6. にぶい黄褐色 10YR6/4 粘質土 (遺物含む)
7. にぶい黄褐色 10YR6/4 - 明黄褐色 10YR6/6 シルト (遺物含む)
8. にぶい黄褐色 10YR7/3 シルト + 明黄褐色 10YR6/6 粘質シルト (遺物含む)
9. にぶい黄褐色 10YR7/3 シルト (遺物含む)
10. 灰黄褐色 10YR6/2 シルト (0m 含む)
11. にぶい黄褐色 10YR5/4 粘砂質土 + 7.5YR/3 層 (0m 含む)
12. 暗灰色 7.5YR4/1 シルト質土 (0m - 後・遺物含む)
13. 灰黄褐色 10YR6/2 粘砂質土 (遺物含む)
14. 黄褐色 10YR2.5/2 粘砂質土
15. にぶい黄褐色 10YR5/4 粘質土 (0m 含む)

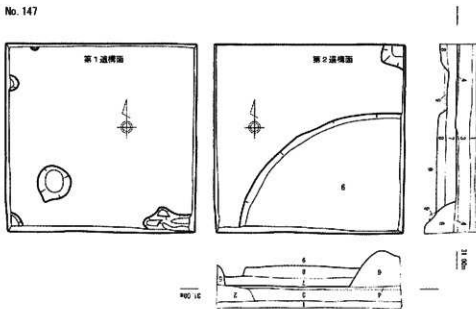
調査区断面図・平面図 7

No. 141



1. 明黄褐色 10YR6/6 ~ にぶい黄色 2.5Y7/4 粘土 + 暗灰黄色 2.5Y5/2 粘質細砂 (近代遺物含む、礫土)
2. 明黄褐色 2.5Y6/6 ~ にぶい黄色 2.5Y6/4 粘土 (近代遺物含む、礫土)
3. 灰黄色 2.5Y7/2 粘質シルト (近代遺物含む)
4. 明黄褐色 2.5Y6/6 粘質土 + 灰黄色 2.5Y6/2 粘質細砂 (遺物含む)
5. 黄褐色 2.5Y5/5 粘砂質粘土 (遺物含む)
6. 黄褐色 2.5Y5/4 粘質土 (遺物含む)
7. 灰黄褐色 2.5Y5/2 粘質粗砂 (遺物含む)
8. 黄褐色 2.5Y5/6 粘質土 (遺物含む)
9. 黄褐色 2.5Y5/3 粘質シルト (礫) + 遺物含む)
10. 灰黄褐色 10YR4/2 粘土 ~ 暗灰色 10YR3/1 細砂 (少シナ、遺物含む)
11. 暗褐色 10YR3/3 粘質土 (礫) 含む)

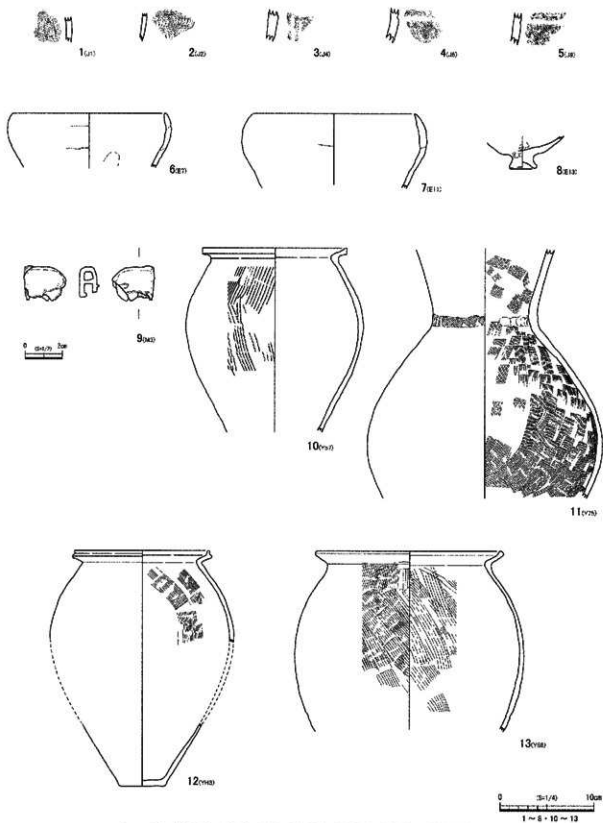
No. 147



1. にぶい黄褐色 10YR5/3 砂質土 (遺物含む)
2. にぶい黄褐色 10YR4 5/3 粘砂質土 (遺物含む)
3. 褐色 10YR4/6 粘質土 (遺物含む)
4. にぶい黄褐色 10YR5/3.5 粘砂質土 (遺物含む)
5. 灰黄褐色 10YR4/2 シルト質土 (鉄多く、遺物含む)
6. 黄褐色 10YR3/2.5 粘質土 (炭、遺物含む)
7. 黄褐色 10YR3/2 粘砂質土 (礫) 多く、遺物含む)
8. 黄褐色 10YR3/2.5 粘砂質土 (礫) + 炭、遺物含む)
9. にぶい黄褐色 10YR4/3.5 粘砂質土 (礫) 含む)

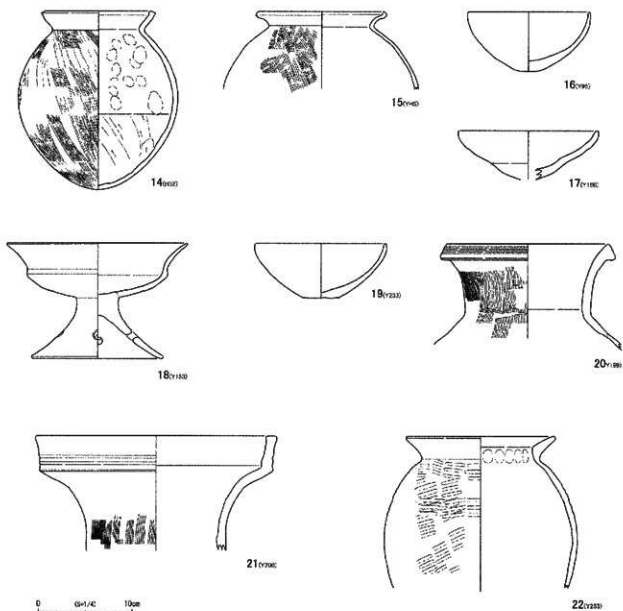
0 (5-1/40) 20m

調査区断面図・平面図 8



1 ~ 4 No.74 5 No.148 6・9 No.64 7 No.83 8 No.89 10 ~ 13 No.70

出土遺物 1



14 ~ 16 No.89 17・18 No.112 19 No.138 20・21 No.129 22 No.150

出土遺物 2

## 7. 長手遺跡 - 3次調査 -

所在地 神代国衙字長手外  
 事業名 経営体育成基盤整備事業（国衙地区第2工区）  
 担当者 山崎裕司  
 種別 本発掘調査  
 調査期間 平成28年6月16日～11月7日  
 調査面積 1,591 m<sup>2</sup>



調査の位置

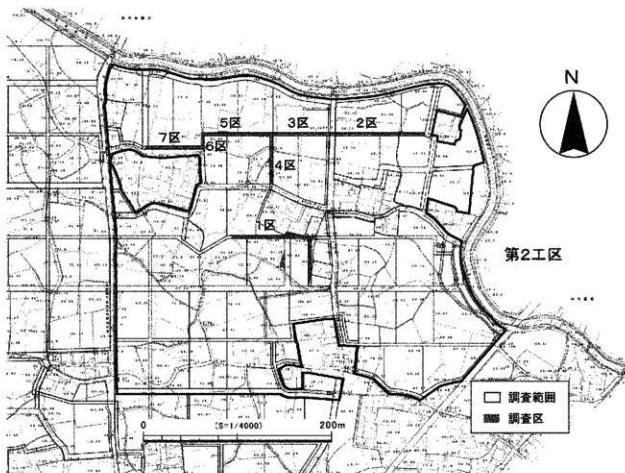
### 1. 調査内容

調査地は三原平野の南部に位置し、南東から北西に緩やかに傾斜し、東から北側を馬乗捨川が流れる。神代国衙地区で行われる景観圏場整備事業に伴い、平成25・26年度に行った確認調査の結果に基づいて調査区を設定した。

1区は近世～近代の遺構しか確認できず、2区は検出遺構が非常に少なかった事から詳細は省略し、以下3～7区について述べる。

[ 3区 ] (246.2 m<sup>2</sup>)

調査区東部で中世後半と思われる柱穴・土坑等を検出した。柱穴から5棟の掘立柱建物SB1～5が



調査区設定図

復元できた。包含層から出土した土製煮炊具 1・2 や S X 13 の出土遺物 5～7 から 16 世紀頃成立した集落の一部である可能性が高い。

S B 1 桁行 4 間 (7.2 m) で調査区外北方向へ続く側柱の建物、あるいは柱間が不規則であることから建物を囲む柵列の可能性も考えられる。方位は N 56° W を示す。

S B 2 桁行 3 間 (5.9 m) で調査区外南方向に続く建物で、方位は N 65° W を示す。

S B 3 梁行 1 間 (2.6 m) で調査区外南方向に続く建物で、方位は N 29° E を示す。

S B 4 梁行 2 間 (4.3 m) で調査区外南方向に続く建物で、方位は N 21° E を示す。

S B 5 梁行 1 間 (2.0 m) で調査区外南方向に続く建物で、方位は N 27° E を示す。

S X 13 土師器小皿 5・7 や龍泉窯系の青磁碗 6 が出土しており、16 世紀頃の遺物と考えられる。

[ 4 区 ] (236.8 m<sup>2</sup>)

検出遺構は少ないが、溝・土坑等が検出された。

S D 12 土師器皿 8 が出土しており、16 世紀頃と考えられる。

[ 5・6 区 ] (301.4 m<sup>2</sup>・47.4 m<sup>2</sup>)

検出遺構は少ないが、中世後半と思われる柱穴・土坑、弥生時代中期後半の流路が検出されている。

柱穴から掘立柱建物 S B 6 が復元できた。

S B 6 南北の柱間が狭く、扉部分を検出したと考えられる。南と西に扉が付き、梁行 2 間 (4.3 m) で調査区外北方向へ続く建物と思われる。方位は N 20° E を示す。S X 12 は S B 6 に関係して何らかの祭祀を行ったと推定され、深さ 5 cm 程度の浅い窪みから、植着した古銭が出土した。皇宋通寶 2 枚・元祐通寶 1 枚・不明 1 枚の計 4 枚である。7 区 S D 5 や S B 8 と方位が似ており、16 世紀頃の建物と推定される。

[ 7 区 ] (222.8 m<sup>2</sup>)

中世後半の柱穴・土坑・溝が検出された。柱穴から 2 棟の掘立柱建物 S B 7・8 が復元できた。

S B 7 梁行 1 間 (2.3 m) で調査区外南方向へ続き、建物を囲む柱穴は柱間が不規則で柵列等と推定される。方位は N 8° W を示す。

S B 8 梁行 1 間 (1.9 m) で調査区外北方向へ続き、建物東側の柱穴は柵列等と推定される。方位は N 19° E を示す。柱穴 16 から 16 世紀頃と思われる土師器小皿 17・18 が出土している。

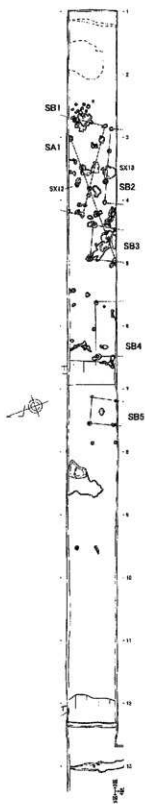
## 2. まとめ

周囲の地形から馬乗拾川が長手遺跡の南側を流れていた事もあると推定され、遺跡周辺は微高地で比較的川の影響を受けにくかったと思われる。ただし土地条件はそれ程良いとは言えないので、弥生時代中期後半に 6 区周辺で小集落が形成された後、本格的に土地開発が行われ、まとまった集落が形成されるのは中世後半になってからと考えられる。

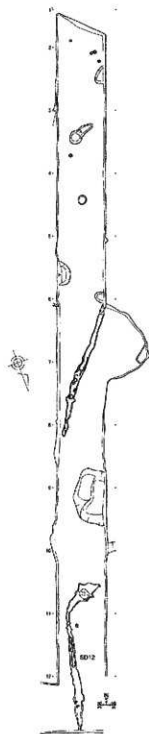
3 区 S B 4・6 区 S B 6・7 区 S B 8 は方位が似ており、S B 4・6 の西側の段差や溝 S D 5 等も似たような方位を示していることから、16 世紀頃に N 20° E 前後の方位で周辺の開発がはじまり、その後南側へ開発が進んで現集落が形成されていったのではないと思われる。したがって開発当初の上記以外の建物は後出すると推定される。

(山崎)





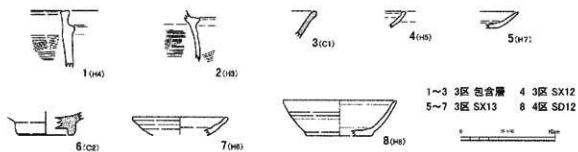
3区



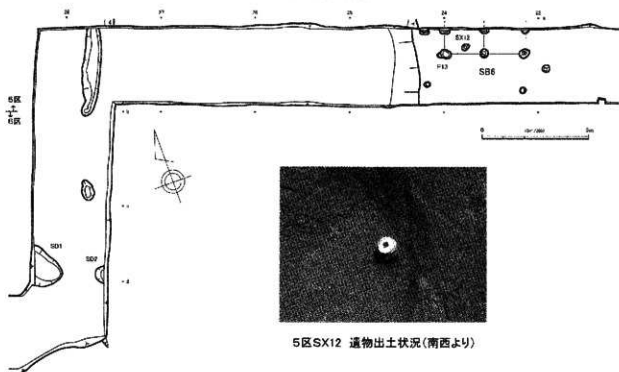
4区



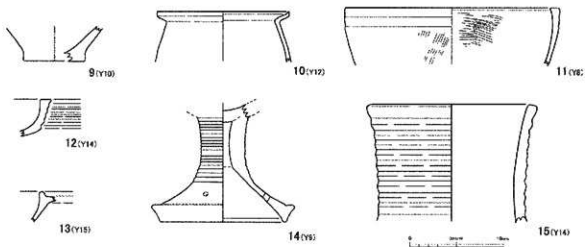
3・4区 平面图



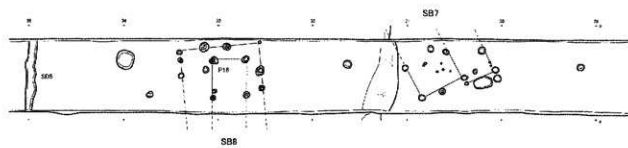
3・4区 出土遺物



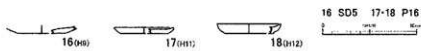
5・6区 平面図



6区 SD1出土遺物



7区 平面图



7区 出土遗物

## 8. 中の御堂遺跡

所在地 松帆慶野字岡  
事業名 中の御堂遺跡園路整備事業  
担当者 定松佳重  
種別 確認調査  
調査期間 平成28年10月3日～10月14日  
調査面積 46.9㎡



調査の位置

### 1. 調査内容

本調査対象地は淡路島最大の平野である三原平野が播磨灘に面し、海と山地が迫った丘陵先端部に位置する。

周辺には海岸部に弥生時代の散布地である松原千疊敷遺跡・戎神社遺跡・次郎谷遺跡、奈良時代の散布地である西原北松原遺跡、中の御堂遺跡すぐ西には縄文時代の散布地である北所遺跡、南西に銅剣14本が出土した古津路銅剣出土地（西原遺跡）・西原北遺跡が立地する。

このたび認定された日本遺産「国生みの島・淡路」の構成文化財に銅剣出土地「中の御堂」が含まれ、見学者の増加が見込まれることから園路の整備を行いたいと所有者から要望があった。県指定史跡ではあるが未調査であったため、事業実施に先立ち遺構範囲確認調査を行うこととなった。

現状は荒地で、かなり起伏に富む。史跡範囲西側のやや平坦部に幅2m、長さ17mのトレンチとそれに交差するトレンチを起伏のあるところに2カ所設定した。

基本層序は①腐葉土、②地山の2次堆積、③砂、④地山となる。③砂（17・19層）より古代と思われる須恵器片が2点出土した。この砂層の供給源は調査地より東の斜面上方となるが、現在確認できる供給源はない。

2～3区にかけては、地山が大きく落ち込み、地山が2次堆積（10層）する。遺物は未確認である。地山と2次堆積の間に腐葉土が確認できることから、自然的な理由で地山が崩れ落ち、しばらくそのままであったが、山崩れ等で一気に埋没したと思われる。

調査区南端部は後世の攪乱土で覆われていた。

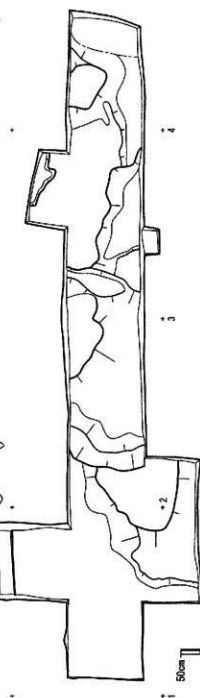
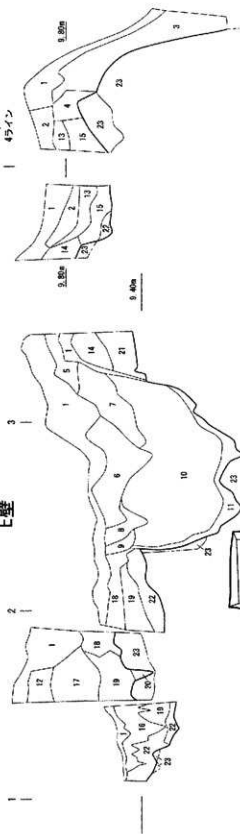
### 2. まとめ

本調査では慶野中の御堂銅剣や弥生時代に関する遺構・遺物は確認できなかった。しかし、古代の遺物が出土したことから、調査区東側になんらかの遺構が埋蔵されている可能性が考えられる。

また、慶野中の御堂銅剣を所有する日光寺は現在松帆櫛田に鎮座するが、もともとは本調査区近辺にあり、約20町の寺域であったと言われている。調査終了後に、調査区西側（北所遺跡範囲内か？）にある田を自主区画整備した際出土したという平安時代の須恵器・土師器を地権者からコンテナ1箱分いただいた。これらと今回出土した須恵器片が日光寺に係る可能性も含めて、今後周辺の調査を考慮する必要がある。

(定松)

# E壁



- 層序図** (1/70)
- 5m
- 平面図** (1/100)
- 5m
- 1 階層色10795/L上+黄砂色10795/砂(北地帯色)
  - 2 階層色10792/L上
  - 3 2階+地盤? 5794/L上
  - 4 地盤 10794/L地盤上
  - 5 階層色10792/L上
  - 6 階層色10794/L上+階層色10793/L上+ブロック段
  - 7 2階+地盤10794/L上+階層色10793/L上+ブロック段
  - 8 地盤 10794/L上
  - 9 地盤 10794/L上+2階ブロック段
  - 10 階層色10792/L上+2階ブロック段
  - 11 階層色10795/L上+黄砂色10795/L上
  - 12 2階+地盤? 5794/L上
  - 13 階層色10792/L上
  - 14 階層色10795/L上+黄砂色10795/L上
  - 15 2階+地盤? 5794/L上
  - 16 2階+地盤? 5794/L上
  - 17 2階+地盤? 5794/L上
  - 18 2階+地盤? 5794/L上
  - 19 2階+地盤? 5794/L上
  - 20 階層色10795/L上+黄砂色10795/L上
  - 21 階層色10795/L上+黄砂色10795/L上
  - 22 階層色10795/L上+黄砂色10795/L上
  - 23 階層色10795/L上+黄砂色10795/L上

調査区平面・層序図

## 9. 中筋古城跡 - 1次調査 -

所在地 広田中筋字杭田  
事業名 宅地造成事業（広田中筋地区・民間）  
担当者 崎崎  
種別 確認調査  
調査期間 平成29年1月17日  
調査面積 8㎡（2×2m2ヶ）



調査の位置

### 1. 調査内容

本調査対象地は初尾川によって形成された段丘の下に位置し、標高35mを測る。中筋古城跡は江戸時代末期の地誌『味地草』に中筋村古城跡として記載され、調査対象地東側の段丘上に鎮座する愛宕神社に該当すると考えられている。中筋古城についての詳細は不明であるが、愛宕神社の境内には浄土教の一派である時宗の講中が天文24（1555）年に浄財を集めて建てた一石五輪塔があり、「時講一結衆為逆修也 乙卯天文廿四年十二月廿八日」と刻まれている。

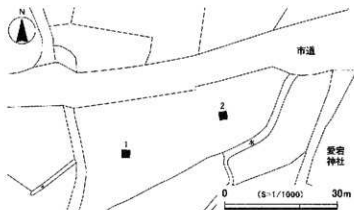
1筆の出圃（1208㎡）に2×2mの調査区を2ヶ所設定した。

№1 西側に設定した調査区である。上層には、戦後に2筆を1筆の田に農地造成した時の客上（2層）が盛られていた。8～12層には古墳時代の土師器1などが含まれていたが、遺構は確認できなかった。

№2 東側に設定した調査区である。№1とは距離的に30m程しか離れていないが、対応できる層はなかった。4層からは13世紀頃の瓦器焼2、8層より下層では弥生時代後期後半～終末期頃の遺物が出土した。特に9層では弥生土器甕3などの土器塊を数ヶ所で確認したが、遺構は確認できなかった。

### 2. まとめ

今回の調査で、調査対象地において中筋古城跡に関連する空町～南北朝時代の遺構・遺物は確認できなかったが、堆積層には弥生時代後期後半～鎌倉時代の遺物が含まれていた。現時点で広田～中条地区において、弥生時代の遺構・遺物は江戸時代に丸で発見された中条銅鐮（所在不明）以外確認されていなかった。今回の調査で弥生土器が出土したことから、弥生時代の集落が周辺に存在することが明らかとなり、この地域の歴史を考える上で大きな成果を得た。調査対象地は段丘の下に位置することから居住には適していなかったと考えられるが、№2の弥生土器の出土状態より、段丘上の集落から流れ込んだ遺物と推測される。（崎崎）



調査区設定図

No.1

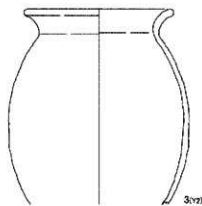
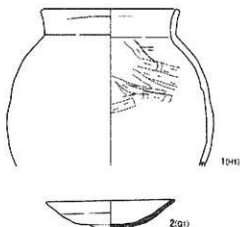
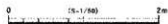


1. 黄褐色 2.5Y5/3 砂質土 (遺物含む)
2. 深部にぶい黄褐色 10YR4/3 土 (赤土、近代遺物 -φ20mm以下層・腐り層含む)
3. 灰黄色 2.5Y7/2 粘質土→明黄褐色 10YR6/6 粘土
4. 黄褐色 2.5Y5.5/3 粘砂質土 (遺物含む)
5. 黄褐色 2.5Y6/1.5 粘砂質土 (遺物含む)
6. 灰黄色 10YR5/2 粘土 (遺物含む)
7. 灰黄色 10YR5/2+にぶい黄褐色 10YR6/4 粘質細砂 (遺物含む)
8. 暗灰黄色 2.5Y5/2 粘土 (遺物含む)
9. 灰黄色 10YR5/2 粘質シルト (遺物含む)
10. 黄褐色 10YR5/6→灰黄色 2.5Y5/2 粘土 (遺物含む)
11. 明黄褐色 10YR6/6 粘土+灰白色 2.5Y7/1 粘細砂質土+黄灰色 2.5Y5/1 シルト (遺物含む)
12. 灰白色 10YR7/1 粘細砂質土+粘灰色 10YR5/1 粘質シルト+明黄褐色 10YR6/6 粘土 (遺物含む)
13. 灰黄色 2.5Y5/2 粘細砂質土 (M) 含む)

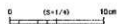
No.2



1. にぶい黄褐色 10YR5/4～明黄褐色 10YR6/6 粘質土 (M・遺物含む)
2. 明黄褐色 10YR7/6 粘質土 (M・遺物含む)
3. 灰黄褐色 10YR5/2 粘質土 (M 多く含む)
4. 黄褐色 7.5YR3/2 粘質土 (M 多く・遺物含む)
5. 黄褐色 7.5YR4/1 粘土 (Fe 沈着)
6. にぶい黄褐色 10YR5/3 粘質土 (Fe 沈着・M 多量・遺物含む)
7. 灰黄褐色 10YR5/2～にぶい黄褐色 10YR4/3 粘質土 (M・遺物含む)
8. 灰黄褐色 10YR5/2～にぶい黄褐色 10YR5/3 粘土 (M・遺物含む)
9. 灰黄褐色 10YR4.5/2 粘土+黄褐色 10YR5/6 粘土 (M・遺物含む)
10. 灰黄褐色 10YR4/2 粘土 (M・遺物含む)
11. 黄褐色 10YR5/6 粘土+灰黄褐色 10YR4/2.5 粘土 (M) 含む)
12. 灰白色 2.5Y7/1 シルト質粘土→にぶい黄褐色 2.5Y5/3 粘土
13. 黄灰色 10YR5/1 シルト質粘土+明黄褐色 10YR6/6 粘土 (M) 含む)
14. 黄灰色 2.5Y5/1→灰黄褐色 10YR5/2 粘質細砂 (M・遺物含む)
15. 灰白色 2.5Y7/1 シルト



- 1 No.1 12層
- 2 No.2 4層
- 3 No.2 9層



調査区層序図・出土遺物

令和4（2022）年3月31日発行

## 南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅱ

2015・2016年度 埋蔵文化財調査

発行 南あわじ市教育委員会

編集 南あわじ市埋蔵文化財調査事務所

〒 656-0455 兵庫県南あわじ市神代国衙 1100

TEL 0799-42-3849

印刷 株式会社奥井印刷

〒 656-0513 兵庫県南あわじ市賀集野田459-1

TEL 0799-53-1314